

# 吉野葛

谷崎潤一郎

青空文庫



## その一 自天王

私が大和やまとの吉野よしのの奥おくに遊んだのは、既に二十年ほどまえ、明治の末か大正の初め頃ころのことであるが、今とは違ちがつて交通の不便なあの時代に、あんな山奥、——近頃の言葉で云いえば「大和アルプス」の地方なぞへ、何しに出かけて行く気になつたか。——この話はまずその因縁いんねんから説とく必要がある。

読者のうちには多分ご承知の方もあろうが、昔からあの地方、十津川つかわ、北山、川上の莊しょうあたりでは、今も土民によつて「南朝様」あるいは「自天王様」と呼ばれている南帝の後裔こうえいに関する伝説

がある。この自天王、——後ご亀山帝かめやまていの玄孫げんそんに当らせられる

北山宮きたやまのみやと云うお方が実際におわしましたことは専門の歴史家

も認めるところで、決して単なる伝説ではない。ごくあらましを

掻かい摘つまんで云うと、普通小中学校の歴史の教科書では、南朝の

元げんちゆう中九年、北朝の明めいとく徳三年、將軍義満よしみつの代に両統合体の

和議が成立し、いわゆる吉野朝なるものはこの時を限りとして、

後醍醐天皇の延えんげん元元年以来五十余年で廃絶はいぜつしたとなっている

けれども、そののち嘉吉三年九月二十三日の夜半やはんくすのき、楠二郎正秀と

云う者が大覚寺統だいかくじとうの親王万寿寺宮まんじゆじのみやを奉じて、急に土御門つちみかど

内裏だいりを襲おそい、三種の神器じんぎを偷ぬすみ出して叡山えいざんに立て籠こもつた事実が

ある。この時、討手うっての追撃ついききを受けて宮は自害し給い、神器のう

ち宝劍ほうけんと鏡とは取り返されたが、神璽しんじのみは南朝方の手に残つたので、楠氏おち越智氏の一族等らは更に宮みやの御子みこお二一方ふたかたを奉ほうじて義兵を挙げ、伊勢いせから紀井きい、紀井から大和と、次第に北朝軍の手の届かない奥吉野の山間僻地へきちへ逃のがれ、一の宮を自天王と崇あがめ、二の宮を征夷せい大將軍たいしようぐんに仰あおいで、年号を天靖てんせいと改元し、容易に敵うかがの窺うかがい知り得ない峽谷きやうこくの間に六十有余年も神璽を擁ようしていたと云う。それが赤松家の遺臣あざむに欺あざむかれて、お二方の宮は討うたれ給すえい、ついに全く大覚寺統のおん末すえの絶えさせられたのが長祿ちやうろく元年十二月であるから、もしそれまでを通算すると、延元元年から元中九年までが五十七年、それから長祿元年までが六十五年、実に百二十二年ものあいだ、ともかくも南朝の流れを酌くみ給うお

方が吉野におわして、京きょう方がたに對抗たいこうされたのである。

遠い先祖から南朝方に無二むにのお味方を申し、南朝びいきの伝統を受け継いで来た吉野の住民が、南朝と云えばこの自天王までを数え、「五十有余年ではありません、百年以上もつづいたのです」と、今でも固く主張するのに無理はないが、私もかつて少年時代に太平記を愛読した機縁から南朝の秘史に興味を感じ、この自天王の御事蹟じせきを中心に歴史小説を組み立ててみたい、——と、そう云う計画を早くから抱いだいていた。川上の荘の口碑こうひを集めたある書物によると、南朝の遺臣等は一時北朝方の襲撃しゅうげきを恐おそれて、今の大台ヶ原山の麓ふもとの入しおの波はから、伊勢の国境大杉谷の方へ這入はいった人跡じんせき稀まれな行き留まりの山奥、三さんの公谷こうだにと云う溪合たにあいに移り、

そこに王の御殿ごてんを建て、神璽かみじはとある岩窟がんくつの中に匿かくしていたと云う。また、上月記こうつきぎ、赤松記等の記す所では、あらかじめ偽いつわつて南帝くたに降くだっていた間嶋彦太郎以下三十人の赤松家の残党は、長祿元年十二月二日、大雪に乗じて不意に事を起し、一手は大河内の自天王の御所ごしよを襲い、一手は神の谷こうたにの將軍の宮の御所に押し寄せた。王はおん自らみずか太刀たちを振ふるつて防がれたけれども、ついに賊ぞくのために斃たおれ給い、賊は王の御首みしるしと神璽とを奪うばつて逃にげる途中とちゆう、雪はばに阻ままれて伯母おぼヶ峰峠みねうげに行き暮れ、御首を雪の中に埋うめて山中にひと夜を明かした。しかるに翌朝吉野十八郷ぎゆうの莊しょうじ司等が追撃して来て奮戦するうち、埋められた王の御首が雪中より血を噴ふき上げたために、たちまちそれを見附みつけ出して奪い返したと云う。

以上の事柄は書物によつて多少の相違はあるのだが、南山なんざんじゆ巡狩録しんしゆろく、南方紀伝なんぽうきでん、桜雲記おううんき、十津川の記等にも皆載みなつてい  
るし、殊ことに上月記や赤松記は当時の実戦者が老後に自ら書き遺のこし  
たものか、あるいはその子孫の手に成る記録であつて、疑う余地  
はないのである。一書によると、王のお歳としは十八歳さいであつたと云  
われる。また、嘉吉かきつの乱にいつたん滅亡めつぼうした赤松の家が再興さ  
れたのは、その時南朝の二王子を弑しして、神璽を京へ取り戻もどした  
功績に報いたのであつた。

いったい吉野の山奥から熊野くまのへかけた地方には、交通の不便なた  
めに古い伝説や由緒ゆいしよある家筋の長く存続しているものが珍めづしく  
ない。たとえば後醍醐天皇が一時行在あんざい所しよにお充あてになつた穴生あのをう



の堀氏ほりの館やかたなど、昔のままの建物の一部が現存するばかりでなく、  
 子孫が今にその家に住んでいると云う。それから太平記の大塔だいとう  
のみやくまの  
 宮熊野落ちの条下に出て来る竹原八郎の一族、——宮はこの  
 家にしばらくらくご滞在になり、同家の娘との間に王子みこをさえ儲もけて  
 いらつしやるのだが、その竹原氏の子孫も栄えているのである。  
 その外ほか更に古いところでは大台ヶ原の山中にある五鬼ごきつぐ継の部落、  
 ——土地の人はあれは鬼の子孫だと云つて、決してその部落と  
 は婚姻こんいんを結ばず、彼等かれらの方でも自分の部落以外とは結ぶことを  
 欲しない。そして自分たちは役えんの行ぎよう者じゃの前鬼ぜんきの後裔こうえいだと称  
 している。すべてがそんな土地柄であるから、南朝の宮方にお仕  
 え申した郷士の血統、「筋目の者」と呼ばれる旧家は数多くあつ

て、現に柏木かしわぎの附近では毎年二月五日に「南朝様」をお祭り申し、將軍の宮の御所跡あとである神の谷の金剛寺こんごうじにおいておごそ厳かな朝拝の式を挙げる。その当日は数十軒けんの「筋目の者」たちは十六の菊きくのご紋章もんしようの附いた袴かみしもを着ることを許され、知事代理や郡長等の上席に就くのである。

私の知り得たこう云ういろいろの資料は、かねてから考えていた歴史小説の計画に熱度を加えずにはいなかった。南朝、——花の吉野、——山奥の神秘境、——十八歳になり給ううら若き自天王、——楠二郎正秀、——岩窟の奥に隠されたる神璽、——雪中より血を噴き上げる王の御首、——と、こう並べてみただけでも、これほど絶好な題材はない。何しろロケーション

が素敵である。舞台には溪流あり、断崖あり、宮殿あり、茅屋あり、春の桜、秋の紅葉、それらを取り取りに生かして使える。しかも拠り所のない空想ではなく、正史はもちろん、記録や古文書が申し分なく備わっているのであるから、作者はただ与えられた史実を都合よく配列するだけでも、面白い読み物を作り得るであろう。が、もしその上に少しばかり潤色を施し、適当に口碑や伝説を取り交ぜ、あの地方に特有な点景、鬼の子孫、おおみね大峰の修験者、熊野参りの巡礼などを使い、王に配するに美しい女主人公、——大塔宮のご子孫の女王子などにしてもいいが、——を創造したら、一層面白くなるであろう。私はこれだけの材料が、なにゆえ今日まで稗史小説家の注意を惹かな

かつたかを不思議に思った。もつとも馬琴ばきんの作に「侠客伝きょうかく」  
 という未完物があるそうで、読んだことはないが、それは楠氏の  
 一女姑摩姫こまひめと云う架空かくうの女性を中心にしたものだと云うから、自  
 天王てんわうの事蹟じせきとは関係がないらしい。外ほかに、吉野王あつかを扱あつかった作品が  
 一つか二つ徳川時代にあるそうだけれども、それとてどこまで史  
 実に準じゆんきよ拠よしたものが明かでない。要するに普通世間ふつうに行き亘わた  
 っている範囲はんいでは、読み本にも、浄瑠璃じようるりにも、芝居しばいにも、つい  
 ぞ眼めに触ふれたものはないのである。そんなことから、私は誰だれも手  
 を染めないうちに、自分が是非共ぜひとその材料をこなしてみたいと思  
 っていた。

ところが、ここに、幸いなことには、思いがけない縁故えんこを辿たどつて、

いろいろあの山奥の方の地理や風俗を聞き込むことが出来た。と云うのは、一高時代の友人の津村と云う青年、——それが、当人は大阪の人間なのだが、その親戚しんせきが吉野の国栖くすに住んでいたので、私はたびたび津村を介かいしてそこへ問い合わせる便宜べんぎがあった。

「くず」と云う地名は、吉野川の沿岸附近ふきんに二箇所かしよある。下流の

方のは「葛」の字を充あて、上流の方のは「国栖」の字を充あてて、

あの飛鳥あすかのきよみはらのすめらみこと浄見原うきよく天皇、——天武天皇てんむにゆかりのある謡よ

曲うきよくで有名なのは後者の方である。しかし葛も国栖も吉野の名

物である葛粉くすこの生産地と云う訳ではない。葛は知らないが、国栖

の方では、村人の多くが紙を作つて生活している。それも今時いまじき

に珍しい原始的な方法で、吉野川の水に楮こうぞの纖維せんいを晒さらしては、手  
ずきの紙を製するのである。そしてこの村には「昆布こんぶ」と云う変  
った姓せいが非常に多いのだそうだが、津村の親戚もまた昆布姓を名  
のり、やはり製紙を業としていて、村では一番手広くやっている  
家であつた。津村が語つたところでは、この昆布氏もかなりの旧  
家で、南朝の遺臣の血統と多少の縁故があるはずであつた。私は、  
「入の波」と書いて「シオノハ」と読たずむこと、「三の公」は「サ  
ンノコ」であることなどを、この家へ尋ねて始めて知つた。なお  
昆布氏の報告によると、国栖から入の波までは、五社峠しゅんげの峻  
嶮んを越えて六里に余る道程であり、それから三の公へは、峡谷  
の口もとまでが二里、一番奥の、昔自天王がいらしたと云う地

点までは、四里以上ある。もつともそれも、そう聞いているだけで、国栖あたりからでもそんな上流地方へ出かける人はめつたにない。ただ川を下つて来る筏師いかだしの話では、谷の奥の八幡平はちまんだいらと云う凹地くぼちに炭焼きの部落が五六軒あつて、それからまた五十丁行つたどんづまりの隠し平かくだいらと云う所に、たしかに王の御殿の跡と云われるものがあり、神璽ほうあんを奉安したと云う岩窟もある。が、谷の入り口から四里の間と云うものは、全く路みちらしい路のない恐ろしい絶壁ぜつべきの連続であるから、大峰修行の山伏やまぶしなどでも、容易にそこまでは入り込まない。普通柏木かしわぎ辺あたりの人は、入の波の川の縁ふちに湧わいている温泉へ浴ゆあみに行つて、あそこから引き返して来る。その実谷の奥を探さぐれば無数の温泉が溪流けいりゆうの中に噴いき出

で、明神みょうじんが滝たきを始めとして幾いくすじとなく飛瀑ひばくが懸かつてい  
であるが、その絶景を知っている者は山男か炭焼きばかりである  
と云う。

この筏師の話は、一層私の小説の世界を豊富にしてくれた。す  
でに好都合な条件が揃そろつているところへ、またもう一つ、溪流から  
湧き出でる温泉と云う、打つて付けの道具立てが加わったのであ  
る。しかし私は、遠隔えんかくの地について調べられるだけの事は調べて  
しまった訳であるから、もしあの時分に津村の勧誘かんゆうがなかった  
ら、まさかあんな山奥まで出かけはしなかつたであろう。これだ  
け材料が集まっていれば、実地を踏査とうさしないでも、あとは自分の  
空想で行ける。またその方がかえって勝手のよいこともあるのだ



が、「せつかくの機会だから来て見てはどうか」と津村からそう云つて来たのは、たしかその年の十月の末か、十一月の初旬しよじゆんであつた。津村は例の国栖の親戚を訪う用がある、それで、三公までは行けまいけれども、まあ国栖の近所をひと通り歩いて、大体の地勢や風俗を見ておいたら、きつと参考になることがある。何も南朝の歴史に限つたことはない、土地が土地だから、それからそれと変つた材料が得られるし、二つや三つの小説の種は大丈夫見つかる。とにかく無駄むだにはならないから、そこは大いに職業意識を働かせたらどうだ。ちようど今は季候もよし、旅行には持つて来いだ。花の吉野と云うけれども、秋もなかなか悪くはないぜ。——と云うのであつた。

で、大そう前置きが長くなつたが、こんな事情で急に私は出かける氣になつた。もつとも津村の云うような「職業意識」も手伝つていたが、正直のところ、まあ漫然まんぜんたる行樂の方が主であつたのである。

その二 妹背山いもせやま

津村は何日に大阪を立つて、奈良は若草山の麓ふもとの武蔵野むさしのと云うのに宿を取っている、——と、そう云う約束やくそくだったから、こちらには東京を夜汽車で立ち、途とちゆう中京都に一泊して二日目の朝奈良に着いた。武蔵野と云う旅館は今もあるが、二十年前とは持主が

変っているようで、あの時分のは建物も古くさく、雅致がちがあつたように思う。鉄道省のホテルが出来たのはそれから少し後のことで、当時はそこと、菊水きくすいとが一流の家であつた。津村は待ちくたびれた形で、早く出かけた様子だつたし、私も奈良は曾遊そうゆうの地であるし、ではいつそのこと、せつかくのお天氣が変らないうちにと、ほんの一二時間座敷ざしきの窓から若草山ながを眺めただけで、すぐ発足した。

吉野口で乗りかえて、吉野駅まではガタガタの軽便鉄道けいべんてつどうがあつたが、それから先は吉野川に沿うた街道かいどうを徒歩で出かけた。万葉集にある六田むつだの淀よど、——柳やなぎの渡しわたのあたりで道は二つに分れる。右へ折れる方は花の名所の吉野山へかかり、橋を渡るとじ

きに下の千本になり、関屋の桜、蔵王権現ざおうごんげん、吉水院きつすいいん、中の千本、——と、毎年春は花見客の雑沓ざつとうする所である。私も実は吉野の花見には二度来たことがあつて、幼少のおり上かみがた方見物の母ともなに伴われて一度、そののち高等学校時代に一度、やはり群集の中に交りつつこの山道を右へ登った記憶きおくはあるのだが、左の方の道を行くのは始めてであつた。

近頃は、中の千本へ自動車やケーブルが通うようになったから、この辺をゆつくり見て歩く人はないだらうけれども、むかし花見に来た者は、きつとこのふたまた二股の道を右へ取り、六田の淀の橋の上へ来て、吉野川の川原かわらの景色けしきを眺めたものである。

「あれ、あれをご覧なさい、あすこに見えるのが妹背山いもせやまです。

左の方が妹山、右の方が背山、——」

と、その時案内の車夫は、橋の欄干らんかんから川上の方を指さして、旅客の筈つえをとどめさせる。かつて私の母も橋の中央に俤くるまを止めて、頑がんぜはない私を膝ひざの上に抱だきながら、

「お前、妹背山の芝居しばいをおぼえているだろう？ あれがほんとうの妹背山なんだとき」

と、耳元へ口をつけて云った。幼いおりのことであるからはつきりした印象は残っていないが、まだ山国は肌寒はださむい四月の中旬の、花ぐもりのしたゆうがた、白々しろしろと遠くぼやけた空の下を、川かわづ面に風の吹く道みちだけ細かいちりめん波を立てて、幾重いくえにも折り重なった遥はるかな山の峽かいから吉野川が流れて来る。その山と山の隙す

間に、小さな可愛い形の山が二つ、ぽうつと夕靄にかすんで見えた。それが川を挟んで向い合っていることまでは見分けるべくもなかつたけれども、流れの兩岸にあるのだと云うことを、私は芝居で知っていた。歌舞伎の舞台では大判事清澄の息子久我之助と、その許嫁の雛鳥とか云つた乙女とが、一方は背山に、一方は妹山に、谷に臨んだ高樓を構えて住んでいる。あの場面は妹背山の劇の中でも童話的色彩のゆたかなところだから、少年の心に強く沁み込んでいたのであろう、そのおり母の言葉を聞くと、「ああ、あれがその妹背山か」と思い、今でもあのほとりへ行けば久我之助やあの乙女に遇えるような、子供らしい空想に耽つたものだが、以来、私はこの橋の上の景色を忘れずにいて、

ふとした時になつかしく想い出すのである。それで二十一か二の歳の春、二度目に吉野へ来た時にも、再びこの橋の欄干に靠れ、亡くなつた母を偲びながら川上の方を見入つたことがあつた。川はちようどこの吉野山の麓あたりからやや打ち展けた平野に注ぐので、水勢の激しい溪流の趣が、「山なき国を流れけり」と云うのんびりとした姿に変わりかけている。そして上流の左の岸に上市の町が、うしろに山を背負い、前に水を控えたひとすじみちの街道に、屋根の低い、まだらに白壁の点綴する素朴な田舎家の集団を成しているのが見える。

私は今、その六田の橋の袂を素通りして、二股の道を左へ、いつも川下から眺めてばかりいた妹背山のある方へ取つた。街道は川

の岸を縫うて真つ真ぐに伸び、みたところ平坦な、楽な道であるが、上市から宮滝、国栖、大滝、迫、柏木を経て、次第に奥吉野の山深く分け入り、吉野川の源流に達して大和と紀井の分水嶺を超え、ついには熊野浦へ出るのだと云う。

奈良を立ったのが早かったので、われわれは午少し過ぎに上市の町へ這入った。街道に並ぶ人家の様子は、あの橋の上から想像した通り、いかにも素朴で古風である。ところどころ、川べりの方家並みが欠けて片側町になっているけれど、大部分は水の眺めを塞いで、黒い煤けた格子造りの、天井裏のような低い二階のある家が両側に詰まっている。歩きながら薄暗い格子の奥を覗いて見ると、田舎家にはお定まりの、裏口まで土間が通つてい



て、その土間の入り口に、屋号や姓名を白く染め抜いた紺こんの暖簾のれんを吊つっているのが多い。店家みせやばかりでなく、しもうたやでもそうするのが普通であるらしい。いずれも表の構えは押し潰つぶしたように軒のきが垂たれ、間口まぐちが狭せまいが、暖簾の向うに中庭の樹立こだちがちらついで、離れ家などのあるのも見える。恐おそらくこの辺の家は、五十年以上、中には百年二百年もたっているのがある。が、建物の古い割りに、どこの家でも障子しょうじの紙が皆新みなしい。今貼はりかえたばかりのような汚よごれ目のないのが貼はってあって、ちよつとした小さな破れ目も花卉型の紙で丹たん念ねんに塞ふさいである。それが澄すみ切きつた秋の空気の中に、冷え冷えと白い。一つは埃ほこりが立たないので、こんな清潔なのでもあろうが、一つはガラス障子を使わない結

果、紙に対して都会人よりも神経質なのであろう。東京あたりの家のように、外側にもうひと重ガラス戸があればよいけれども、そうでなかったら、紙が汚れて暗かったり、穴から風が吹き込んだりしては、捨てて置けない訳である。とにかくその障子の色のすがすがしさは、軒並みの格子や建具の煤ぼけたのを、貧しいながら身だしなみのよい美女のように、清楚で品よく見せている。私はその紙の上に照っている日の色を眺めると、さすがに秋だなあと云う感を深くした。

実際、空はくつきりと晴れているのに、そこに反射している光線は、明るいながら眼を刺すほどでなく、身に沁みるように美しい。日は川の方へ廻つていて、町の左側の障子に映えているのだが、

その照り返しが右側の方の家々の中まで届いている。八百屋の店先に並べてある柿かきが殊ことに綺麗きれいであつた。キザ柿、御所柿ごしよがき、美濃みのの柿かき、いろいろな形の柿の粒つぶが、一つ一つ戸外の明りをそのつやつやと熟し切つた珊瑚色さんごの表面に受け止めて、瞳ひとみのように光つている。饅頭屋うづんのガラスの箱はこの中にある饅頭の玉までが鮮あざやかである。往来には軒先むしろに蕙しを敷いたり、箕みを置いたりして、それに消炭けしずみが乾ほしてある。どこかで鍛冶屋かじやの槌つちの音と精米機のサアサア云う音が聞える。

私たちは町はずれまで歩いて、とある食い物屋の川沿いの座敷で昼食を取つた。妹背の山は、あの橋の上で眺めた時はもつとずつと上流にあるように思えたが、ここへ来るとつい眼の前に立つ二

つの丘であつた。川を隔てて、こちらの岸の方が妹山、向うの  
 岸の方が背山、——妹背山婦女庭訓の作者は、恐らくこ  
 この实景に接してあの構想を得たのだろうが、まだこの辺の川  
 幅は、芝居で見るよりも余裕があつて、あれほど迫つた溪流で  
 はない。仮りに両方の丘に久我之助の楼閣と雛鳥の楼閣があつ  
 たとしても、あんな風に互に呼応することは出来なかつたらう。  
 背山の方は、尾根がうしろの峰につづいて、形が整つていないけ  
 れども、妹山の方は全く独立した一つの円錐状の丘が、こ  
 んもりと緑葉樹の衣を着ている。上市の町はその丘の下までつづ  
 いていて、川の方から見わたすと、家の裏側が、二階家は三階に、  
 平家は二階になっている。中には階上から川底へ針金の架線を

渡し、それへバケツを通して、綱つなでスルスルと水を汲くみ上げるようにしたのもある。

「君、妹背山の次にはよしつねせんぼんざくら義経千本桜があるんだよ」と、津村がふとそんなことを云つた。

「千本桜しもいちなら下市つるべずしやだろう、あそこの釣瓶つるべずしや鮎屋と云うのは聞いているが、——」

これもり維盛が鮎屋の養子になつて隠かくれていたと云う浄瑠璃の根なし事が元になつて、下市の町にその子孫と称する者が住んでいるのを、私は訪ねたことはないが、噂うわさには聞いていた。何でもその家では、いがみの権太ごんたこそいないけれども、いまだに娘むすめの名をお里さとと付けて、釣瓶鮎つるべずしやを売っていると云う話がある。しかし津村の持ち出し

たのは、それとは別で、例の静御前の初音の鼓、——あれを  
 宝物として所蔵している家が、ここから先の宮滝の対岸、菜摘の  
 里にある。で、ついでだからそれを見て行こうと云うのであつた。  
 菜摘の里と云えば、謡曲の「二人静」に謡われている菜摘  
 川の岸にあるのであろう。「菜摘川のほとりにて、いずくともな  
 く女の来り候いて、——」と、謡曲ではそこへ静の亡霊が現  
 じて、「あまりに罪業のほど悲しく候えば、一日経書いて賜わ  
 れ」と云う。後に舞いの件になつて、「げに耻かしや我ながら、  
 昔忘れぬ心とて、……今三吉野の河の名の、菜摘の女と思うな  
 よ」などとあるから、菜摘の地が静に由縁のあることは、伝説と  
 しても相当に根拠があるらしく、まんざら出鱈目ではないかも

知れない。大和名所図会などにも、「菜摘の里に花籠の水とて  
 名水あり、また静御前がしばらく住みし屋敷趾あり」とあるのを  
 見れば、その云い伝えが古くからあつたことであろう。鼓を持っ  
 ている家は、今は大谷姓を名のつてゐるけれども、昔は村国の庄し  
ようじ司と云つて、その家の旧記によると、文治年中、義経よしつねと静御  
 前とが吉野へ落ちた時、そこに逗とうりゆう留してゐたことがあると云  
 われる。なお附近には象きよこの小川、うたたねの橋、柴橋しばはし等の名所  
 もあつて、遊覧かたがた初音の鼓を見せてもらいに行く者もある  
 が、家重いえじゆう代だいの宝だと云うので、然しかるべき紹介しょうかい者しやから前日  
 に頼たのみでもしなければ、無闇むやみな者には見せてくれない。それで津  
 村は、実はそのつもりで国栖くすの親戚から話しておいて貰もらつたから、

多分今日あたりは待っているはずだと云うのである。

「じゃあ、あの、親おやぎつね狐この皮で張つてあるんで、静御前がその鼓をぽんと鳴らすと、忠ただのぶ信狐が姿を現わすと云う、あれなんだね」

「うん、そう、芝居ではそうなっている」

「そんなものを持っている家があるのかい」

「あると云うことだ」

「ほんとうに狐の皮で張つてあるのか」

「そいつは僕ぼくも見ないんだから請うけ合あえない。とにかく由ゆい緒しよのある家だと云うことは確かだそうだ」

「やっぱりそれも釣瓶鮎屋おんなと同じようなものじゃないかな。謡曲



に『二人静』があるんで、誰か昔のいたずら者が考え付いたことなんだろう」

「そうかも知れないが、しかし僕はちよつとその鼓に興味があるんだ。是非その大谷と云う家を訪ねて、初音の鼓を見ておきたい。

——とうから僕はそう思っていたんだが、今度の旅行も、それが目的の一つなんだよ」

津村はそんなことを云って、何か訳があるらしかったが、「いづれ後で話をする」と、その時はそう云ったきりであつた。

## その三 初音の鼓

上市から宮滝まで、道は相変らず吉野川の流れを右に取って進む。山が次第に深まるに連れて秋はいよいよたけなわに闌になる。われわれはしばしばくぬぎ櫟林の中に這入はいって、一面に散り敷く落葉の上をかさかさ音を立てながら行つた。この辺へん、楓かえでが割合いに少く、かつひと所にかたまつていないけれども、紅葉こうようは今が真まつ盛りさかりで、蔦つた、櫨はぜ、やまうるし山漆すぎなどが、杉すぎの木の多い峰のここかしこに点々として、最もこくれない濃い紅うすから最も薄うすい黄いたに至る色とりどりの葉を見せている。ひと口に紅葉と云うものの、こうして眺めると、黄の色も、褐かつの色も、紅の色も、その種類が実に複雑である。おなじ黄色い葉のうちにも、何十種と云うさまざまな違つた黄色がある。野州やしゅう塩原の秋は、塩原じゅうの人の顔が赤くなると云われているが、そう

云うひと色に染まる紅葉も美観ではあるけれども、ここのようなのも悪くはない。「繚乱りょうらん」と云う言葉や、「千紫万紅せんしばんこう」と云う言葉は、春の野の花を形容したものであろうが、ここのは秋のトーンであるところの「黄」を基調にした相違そういがあるだけで、色彩の変化に富むことはおそらく春の野に劣るまい。そうしてその葉が、峰と峰との裂け目さから溪合たにあいへ溢れ込あふむ光線の中を、とどき金粉きんぷんのようにきらめきつつ水に落ちる。

万葉に、「天皇幸于吉野宮」とある天武天皇の吉野の離宮、——  
 | 笠朝臣金村かさのあそみかなむらのいわゆる「三吉野乃多芸都河内之大宮所みやしぬのたぎつこうちのおみやどころ」、  
 三船山、人麿ひとまろの歌った秋津の野辺等のべは、皆みなこの宮滝村の近くである  
 すると云う。私たちはやがて村の中途から街道を外はずれて対岸へ渡

った。この辺で溪はようやく狭まって、岸が峻しい断崖になり、激した水が川床の巨岩に打つかり、あるいは真つ青な淵を湛えている。うたたねの橋は、木深い象谷の奥から象の小川がちよろちよろと微かなせせらぎになって、その淵へ流れ込むところに懸っていた。義経がここでうたたねをした橋だと云うのは、多分後世のこじつけであろう。が、ほんのひとすじの清水の上に渡してある、きやしやな、危げなその橋は、ほとんど樹々の繁みに隠されていて、上に屋形船のそのような可愛い屋根が附いているのは、雨よりも落葉を防ぐためではないのか。そうしなかつたら、今のような季節にはたちまち木の葉で埋まってしまうかと思われ

る。橋の袂に二軒の農家があつて、その屋根の下を半ば我が家の

物置きに使っているらしく、人の通れる路を残して薪たきぎの束たばが積たんである。ここは樋口ひぐちと云う所で、そこから道は二つに分れ、一方は川の岸を菜摘の里へ、一方はうたたねの橋を渡り、桜木の宮、喜佐谷村きさだにを経て、上かみの千本から苔こけの清水、西行庵さいぎようあんの方へ出られる。けだし静しずかの歌にある「峰の白雪踏ふみ分わけて入りにし人」は、この橋を過ぎて吉野の裏山から中院の谷の方へ行つたのである。気が付いてみると、いつの間にか私たちの行く手には高い峰まゆが眉まゆ近く聳そびえていた。空の領分は一層狭くちぢめられて、吉野川の流ながれも、人家も、道も、ついもうそこで行き止まりそんな溪谷であるが、人里と云うものは挟間はさまがあればどこまでも伸びて行くものと見えて、その三方を峰のあらしで囲まれた、袋ふくろの奥おくのような凹く

地の、せせこましい川べりの斜面に段を築き、草屋根を構え、畑を作っている所が菜摘の里であると云う。

なるほど、水の流れ、山のたたずまい、さも落人の栖みそうな地相である。

大谷と云う家を探ねると、すぐに分つた。里の入り口から五六丁行つて、川原の方へ曲つた桑畑の中にある、ひと際立派な屋根の家であつた。桑が丈高く伸びているので、遠くから望むと、旧家らしい茅葺きの台棟と瓦葺きの庇だけが、桑の葉の上に、海中の島のごとく浮いて見えるのがいかにも床しい。しかし実際の家は、屋根の形式の割合いに平凡な百姓家で、畑に面したふた間つづきの出居の間の、前通りの障子を明け放しにして、

その床の間つきの方の部屋に主人らしい四十かっこう恰好の人がすわっていた。そして二人の姿を見ると、刺しを通ずるまでもなく挨拶あいさつに出たが、固く引き締しまった日に焼けた顔の色と云い、シヨボシヨボした、人の好きそうな眼めつきと云い、首の小さい、肩幅かたはばの広い体格と云い、どうしても一介いつかいの愚直ぐちよくな農夫である。「国栖の昆布さんからお話がありましたので、先程からお待ちしていただきました」と、そう云う言葉さえ聞き取りにくい田舎訛なまりで、こちらが物を尋ねてもはかばかしい答えもせず、ただ律義りちぎらしく時儀ぎをして見せる。思うにこの家は今は微禄びろくして、昔の倅おもかげはないのであろうが、それでも私にはかえってこう云う人柄の方が親しみ易やすい。「お忙いそがしいところをお妨さまたげして済みませぬ。お宅様ではお

家の宝物ほうもつを大切にしていらしつて、めつたに人にお見せにならぬそうですが、無ぶ躰しつながらその品を見せて戴いたきに参たつたのです」と云うと、「いえ、人に見せぬと申す訳ではありませぬが」と当と惑うそうにオドオドして、実はその品物を取り出す前には、七日の間潔けつ斎さいせよと云う先祖からの云い伝えがある、しかし当節はそんなやかましいことを云つてもいられないから、希望の方には心安く見せて上げようと思つてゐるけれども、日々耕こう作さくに追われる身なので、不意に訪ねて来られては相手になつてゐる時間がない。殊に昨今は秋蚕あきごの仕事が片附かないので家じゅうの畳たたみなども不断は全部揚あげてあるような訳だから、突とつ然ぜんお客様が見えても、お通し申す座敷もないと云う始末、そんな事情で、前にちよ



つと知らせて置いて下すつたら、必ず何とか繰り合わせてお待ちしている、と、真つ黒な爪つめの伸びた手を膝ひざの上に重ねて、云いくそうに語るのである。

して見れば、今日は特に私たちのために、このふた間の部屋へわざわざ畳畳を敷き詰めて待っていてくれたに違いない。襖ふすまの隙から納戸なんどの方を窺うかがうと、そこはいまだに床板のままで、急にそちらへ押し込めたらしい農具がごたごたに片寄せてある。床の間には既すでに宝物の数々が飾かざってあつて、主人はそれらの品を一つ一つ、恭しく私たちの前に並べた。

「菜摘なつみむら郵来らいゆ由」と題する巻物が一巻、義経公より拝領の太刀脇たちわ差数口さざし、及びおよびその目録、鐔つば、鞞うづほ、靴とっき、陶器の瓶子へいし、それから静御前

より賜たまわつた初音はつねの鼓等つづみの品々。そのうち菜摘邨来由の巻物は、  
 卷末に「右者五条御代官御役所時之御代官内藤左衛門様もくざえもん當時に  
 被遊御出御中付候二付大谷源兵衛げんべえ七十六歳にて伝聞のまま之儘を書記し  
 我家に残し置者也」とあつて、「安政あんせい二歳次乙卯夏きのとう日」と云  
 う日附けがある。その安政二年の歳に代官内藤左衛門が当村へ  
 来た時、今の主人の何代か前の先祖にあたる大谷源兵衛老人は土ど  
 下座げざをして対面したが、この書付けを見せると、今度は代官の方  
 が席ゆずを譲つて土下座をしたと伝えられている。但しただ、巻物は紙が  
 黒焦こげに焦こげたごとく汚れていて、判読に骨が折れるため、別に  
 写しが添そえてある。原文の方はどうか分らぬが、写しの方は誤字  
 誤文はなはだが夥ふしく、振り仮名がな等にも覚束おぼつかない所が多々あつて、  
 到とつて

底い正式の教養ある者の筆に成つたとは信ぜられない。しかしそ

の文によると、この家の祖先は奈良朝以前からこの地に住し、壬じ

んしん

むらくにのしようじおより

申おの乱には村国庄司男依おなる者天武帝のお味方を申して大

おとものみこ

うたてまつ

友皇子を討ち奉つた。その頃庄司は当村より上市に至る五十丁

の地を領していたので、菜摘川と云う名はその五十丁の間の吉野

川を呼ぶのであると云う。さて義経あそばに關しては、「また源義経公

川上白矢ガ嶽にて五月節句をお祝遊あそばされそれより御下りこれあり

村国庄司内にて三四十日被遊御べごと逗留りゆう宮滝柴橋御覽お有りその時御

詠よみの歌に」として二首の和歌が載のっている。私は今日までまだ

義経の歌と云うものがあるのを知らないが、そこに記してある和

歌は、いかな素人眼しろうとめにも王朝末葉の調子とは思えず、言葉づか

いも余りはしたない。次に静御前の方は、「その時義経公の愛あいし  
よう妾 静御前村国氏の家にご逗留あり義経公は 奥おうしゆう 州おちゆき に落 行給  
 いしより今は早はやたの 頼たの み少なしとてお命を捨給いたる井戸あり静井  
 戸もうしと申伝え 候そうろうなり 也」とあるから、ここで死んだことになつてい  
 るのである。なおその上に、「然しかるに静御前義経公に別れ給いし  
もうねん妄 念ねんにや夜な夜な火玉となりて右乃井戸より出いでし事凡およそ三百年そ  
ころの頃ころおい飯貝村に蓮れん 如によしようにん 上 人 諸人を化益けやくましましければ村人上  
 人あいたのみを 相 頼あいたのみ 静乃亡霊を濟度さいどし給わんやと願ねがいければ上人そう左右なく  
 接引し給い静御前乃振ふりそで 袖 大谷氏に秘蔵いたせしに一首乃歌をな  
 ん書記し給いぬ」としてその歌が挙げてある。

私たちがこの巻物を読む間、主人は一言の説明を加えるでもなく、

黙だまつて畏かしこまつているだけであった。が、心中何の疑いもなく、父祖伝来のこの記事の内容を頭から盲もうしん信しんしているらしい顔つきである。「その、上人がお歌を書かれた振袖はどうされましたか」と尋ねると、先祖の時代に、静ほだいの菩提とむらを弔うために村の西生寺と云う寺へ寄附きふしたが、今は誰だれの手に渡ったか、寺にもなくなつてしまつたとのこと。太刀、脇差、鞆うづは等を手に取つて見るのに、相当年代の立つたものらしく、殊に鞆はぼろぼろにいたんでいるけれども、私たちに鑑かんてい定の出来る性質のものではない。問題の初音の鼓は、皮はなくて、ただ胴どうばかりが桐きりの箱はこに収まつていた。これもよくは分らないが、漆うるしが比較的新しいようで、蒔まき絵えの模様もようなどもなく、見たところ何の奇きもない黒無地の胴である。もつと

も木地は古いようだから、あるいはいつの代かに塗り替えたものかも知れない。「さあそんなことかも存じませぬ」と、主人は一向無関心な返答をする。

外に、屋根と扉の附いた蔽めしい形の位牌が二基ある。一つの扉には葵の紋があつて、中に「贈正一位大相国公尊儀」と刻し、もう一つの方は梅鉢の紋で、中央に「帰真 松誉貞玉信女霊位」と彫り、その右に「元文二年巳年」、左に「壬十一月十日」とある。しかし主人はこの位牌についても、何も知るところはないらしい。ただ昔から、大谷家の主君に当る人のものだと云われ、毎年正月元日にはこの二つの位牌を礼拝するのが例になっている。そして元文の年号のある方を、あるいは静御前のではないかと思

います。と、真顔まがおで云うのである。

その人の好きよさそうな、小心らしいシヨボシヨボした眼を見ると、私たちは何も云うべきことはなかった。今更元文の年号がいつの時代であるかを説き、静御前の生しょうがい涯がいについて吾妻鑑あずまかがみや平家物語を引き合いに出すまでもあるまい。要するにここの主人は正直いちぢず一途いちぢずにそう信じているのである。主人の頭にあるものは、鶴ヶ岡おかの社頭おかしらにおいて、頼朝よりともの面前で舞を舞ったあの静とは限らない。それはこの家の遠い先祖が生きていた昔、——なつかしい古代を象徴しょうちようする、ある高貴の女性である。「静御前」と云う一人の上じようろう臈ろうの幻影げんえいの中に、「祖先」に対し、「主君」に対し、「古えいにし」に対する崇敬すうけいと思慕しほの情とを寄せているのである。

そう云う上臈が實際この家に宿を求め、世を住み侘びていたかどうかを問う用はない。せつかく主人が信じているなら信じるに任せておいたらよい。強いて主人に同情をすれば、あるいはそれは静ではなく、南朝の姫ひめみや宮方であつたか、戦国頃の落人であつたか、いずれにしてもこの家が富み榮えていた時分に、何か似寄りの事実があつて、それへ静の伝説が紛れ込んだものかも知れない。私たちが辞して帰ろうとすると、

「何もお構い出来ませぬが、ずくしを召し上つて下さいませ」と、主人は茶を入れてくれたりして、盆ぼんに盛つた柿かきの実に、灰の這はい入つていない空からの火入れを添そえて出した。ずくしはけだし熟う※に熟うれた※しながら、日に透すかすと琅玕ろうかんの



珠たまのように美しい。市中に売っている樽※に崩れてしまう。主人が云うのに、ずくしを作るには皮の厚い美濃※としたものにならない。これを食うには半熟の卵を食うようにへたを抜き取って、その穴から匙さじですくう法もあるが、やはり手はよごれても、器に受けて、皮を剥はいでたべる方が美味である。しかし眺めても美しく、たべてもおいしいのは、ちょうど十日目頃のわずかな期間で、それ以上日が立てばずくしもついに水になってしまうと云う。

そんな話を聞きながら、私はしばらく手の上にある一いっか顆つぶの露つゆの玉に見入った。そして自分の手のひらの中に、この山間の靈れい氣いきと日光ひかりとが凝こり固こまった気がした。昔田舎者が京へ上ると、都の土をひと握にぎり紙かみに包かんで土産みやげにしたと聞いているが、私がもし誰かか

ら、吉野の秋の色を問われたら、この柿の実を大切に持ち帰って示すであろう。

結局大谷氏の家で感心したものは、鼓よりも古文書よりも、ずくしであつた。津村も私も、齒ぐきから腸はらわたの底へ沁しみ徹とおる冷めたさを喜びつつ甘い粘ねばつこい柿の実を貪むさぼるように二つまで食べた。私は自分の口腔こうこうに吉野の秋を一いっ杯ぱいに頬張ほおばつた。思うに仏典中にある菴摩羅果あんもらかもこれほど美味ではなかつたかも知れない。

その四 狐こんかい噺

「君、あの由来書きを見ると、初音つづみの鼓は静御前の遺物とあるだ

けで、狐きつねの皮と云うことは記してないね」

「うん、——だから僕は、あの鼓の方が脚きやくほん本より前にある

のだと思う。後で拵こしらえたものなら、何とかもう少し芝居の筋に関

係を付けないはずはない。つまり妹背山の作者が实景を見てあの

趣向を考えついたように、千本せんほんぎんくら桜の作者もかつて大谷家を訪

ねたか噂うわさを聞いたかして、あんなことを思いついたんじゃないか

ね。もつとも千本桜の作者は竹田出雲いずもだから、あの脚本の出来た

のは少くとも宝曆ほうれき以前で、安政二年の由来書きの方が新しいと

云う疑問がある。しかし『大谷源兵衛七十六歳にて伝聞のままを

書記し』たと云っている通り、伝来はずっと古いんじゃないか。

よしんばあの鼓が贗物にせものだとしても、安政二年に出来たものでな

く、ずっと以前からあつたんだと云う想像をするのは無理だろう  
か」

「だがあの鼓はいかにも新しそうじゃないか」

「いや、あれは新しいか知れないが、鼓の方も途中で塗り換ぬえたり造り換かえたりして、二代か三代立っているんだ。あの鼓の前には、もつと古い奴やつがあきりの桐ほこの箱の中に収まつていたんだと思うよ」

菜摘なぢの里から対岸の宮滝へ戻るには、これも名所の一つに数えられてこしいる柴橋しばしを渡るのである。私たちはその橋の袂たもとの岩の上に腰こしかけながらしばらくそんな話をした。

貝原益軒かいばらえきけんの和州巡覧記に、「宮滝は滝にあらず両方に大岩あり

その間を吉野川ながるなり也なり兩岸は大なる岩なり岩の高さ五間ば

かり屏風びょうぶを立たるごとし兩岸の間川の広さ三間ばかりせばき所に橋あり大河ここに至いたつてせばきゆえ河水はなはだ甚深しその景絶妙也なり」  
とあるのが、ちようど今私たちの休んでいるこの岩から見た景色であろう。「里人岩いわとび飛とて岸の上より水底へ飛入て川下におよぎ出て人に見せ銭をとる也飛とときは両手を身にそえ両足をあわせて飛入水中に一丈じょうばかり入て両手をはれば浮み出るといふ」とあって、名所図会にはその岩飛びの図が出ているが、兩岸の地勢、水の流れ、あの絵の示す通りである。川はここへ来て急カーヴを描きつつ巨大な巖いわおの間へ白泡を噴たいて沸たり落ちる。さつき大谷家で聞いたのに、毎年い箒かたがこの岩に打ぶつかつて遭そう難なんすることが珍しくないと言う。岩飛びをする里人は、平生この辺で釣つりをした

り、耕したりして、たまたま旅人の通る者があれば、早速  
勧誘して得意の放れ業はなわぎを演じて見せる。向う岸のやや低い岩から  
飛び込むのが百文、こちら岸の高い方の岩からなら二百文、それ  
で向うの岩を百文岩、こちらの岩を二百文岩と呼び、今にその名  
が残っているくらいで、大谷家の主人も若い時分に見たことがあ  
るけれども、近頃はそんなものを見物する旅客も稀まれになり、いつ  
か知らず滅びてしまったのだそうである。

「ね、昔は吉野の花見と云うと、今のように道が拓ひらけていなかっ  
たから、宇陀郡うだの方を廻まわつて来たりして、この辺を通る人が多か  
つたんだよ。つまり義経の落ちて来た道と云うのが普通の順路じ  
やなかったのかね。だから竹田出雲なんぞきつとここへやつて来

て、初音の鼓を見たことがあるんだよ」

——津村はその岩の上に腰をおろして、いまだに初音の鼓のことをなぜか気にかけているのである。自分はただのぶぎつね忠信狐ではないが、初音の鼓を慕したう心は狐にも勝るくらいだ、自分は何だか、あの鼓を見ると自分の親に遇あつたような思いがする、と、津村はそんなことを云い出すのであった。

ここで私は、この津村と云う青年の人となりをあらまし読者に知って置いて貰わねばならない。実を云うと、私もその時その岩の上で打ち明け話を聞かされるまで委くわしいことは知らなかった。——と云うのは、前にもちよつと述べたように、彼と私とは東京の一高時代の同窓で、当時は親しい間柄であつたが、一高から大

学へ這入る時に、家事上の都合と云うことで彼は大阪の生家へ帰り、それきり学業を廃<sup>はい</sup>してしまつた。その頃私が聞いたのでは、津村の家は島の内の旧家で、代々質屋を営み、彼の外<sup>ほか</sup>に女のきようだいが二人あるが、両親は早く歿<sup>ぼつ</sup>して、子供たちは主に祖母の手で育てられた。そして姉妹はつとに他家へ縁づき、今度妹も嫁入り先がきまつたについて、祖母も追い追い心細くなり、悴<sup>せがれ</sup>を側へ呼びたくなつたのと、家の方の面倒を見る者がないので、急に学校を止<sup>や</sup>めることにした。「それなら京大へ行つたらどうか」と、私はすすめてみたけれども、当時津村の志は学問よりも創作にあつたので、どうせ商売は番頭任せでよいのだから、暇<sup>ひま</sup>を見てぼつぼつ小説でも書いた方が気楽だと、云うつもりらしかつた。



しかしそれ以来、ときどき文通はしていたのだが、一向物を書いて  
いるらしい様子もなかった。ああは云つても、家に落ち着いて  
暮らしに不自由のない若旦那わかだんなになつてしまえば、自然野心おとろも衰  
えるものだから、津村もいつとなく境きょうぐう遇ぐうに馴なれ、平穩へいおんな町  
人生活に甘んずるようになったのであろう。私はそれから二年ほ  
ど立つて、ある日彼からの手紙の端に祖母が亡くなつたと云う知  
らせを読んだ時、いずれ近いうちに、あの「御料人様ごりょうにんさん」と云  
う言葉にふさわしい上方風な嫁よめでも迎むかえて、彼もいよいよ島の  
内の旦那衆だんなしゅうになり切ることだろうと、想像していた次第であつ  
た。

そんな事情で、その後津村は二三度上京したけれども、学校を出

てからゆつくり話し合う機会を得たのは、今度が始めてなのである。そして私は、この久ひさし振ぶりで遇あう友の様子が、大体想像の通りであったのを感じた。男も女も学生生活を卒おえて家庭の人になると、にわかにならぬ栄養が良くなったように色が白く、肉づきが豊かになり、体質に変化が起るものだが、津村の人柄にもどこか大阪のぼんちらしいおっとりした円みが出来、まだ抜け切れない書生言葉のうちにも上方かみがたなま訛りのアクセントが、——前けんから多少そうであつたが、前よりは一層けん顕著ちよに——交るのである。と、  
こう書いたらおおよそ読者も津村と云う人間の外がい貌ぼうを会得されるであらう。

さてその岩の上で、津村が突然語り出した初音の鼓と彼自身に纏まつ

わる因縁いんねん、——それからまた、彼が今度の旅行を思い立つに  
 至った動機、彼の胸に秘めていた目的、——そのいきさつは相  
 当長いものになるが、以下なるべくは簡略に、彼の言葉の意味を  
 伝えることにしよう。——

自分のこの心持は大阪人でないと、また自分のように早く父母を  
 失って、親の顔を知らない人間でないと、（——と、津村が云  
 うのである。）到底とうてい理解りかいされないかと思う。君もご承知の通り、  
 大阪には、浄瑠璃じょうるりと、生田流いくたの箏そう曲きよくと、地唄じうたと、この三つ  
 の固有な音楽がある。自分は特に音楽好きと云うほどでもないが、  
 しかしやはり土地の風習でそう云うものに親しむ時が多かったか

ら、自然と耳について、知らず識らず影響を受けている点が少くない。取り分けいまだに想い出すのは、自分が四つか五つのおり、島の内の家の奥の間で、色の白い眼元のすずしい上品な町方の女房と、盲人の検校とが琴と三味線を合わせていた、——その、ある一日の情景である。自分はその時琴を弾いていた上品な婦人の姿こそ、自分の記憶の中にある唯一の母の倅であるような気がするけれども、果してそれが母であったかどうかは明かでない。後年祖母の話によると、その婦人は恐らく祖母であったろう、母はそれより少し前に亡くなったはずであると云う。が、自分はまたその時検校とその婦人が弾いていたのは生田流の「狐喰」と云う曲であったことを不思議に覚えているのである。

思うに自分の家では祖母を始め、姉や妹が皆その檢校の弟子であつたし、その後も折々狐嚙の曲を繰り返し聴いたことがあるから、始終印象が新たにされていたのであろう。ところでその曲の詞と云うのは、――

いたわしや母上は、花の姿に引き替えて合しおるる露の床の内  
 合智慧の鏡も搔き曇る、法師にまみえ給いつつ合母も招けばう  
 しろみ返りて合さらばと云わぬ合ばかりにて、泣くより外の合  
 事ぞなき、野越え山越え里打ち過ぎて合来るは誰故ぞ合さま  
 故合誰故来るは合来るは誰故ぞ様故合君は帰るか恨めしやのう  
 やれ合我が住む森に帰らん我が思う思う心のうちは白菊岩隠  
 れ薦がくれ、篠の細道搔き分け行けば、虫のこえごえ面白や合

降りそむる、やれ降りそむる、けさだにも合あけさだにも合所あは跡あともなかりけり合西あせは田あぜの畦あぜあぶないさ、谷峯みねしどろに越え行あけ、あの山越えてこの山越えて、こがれこがるるうき思い。

——自分は今では、この節ふしまわ廻まわしも合あいの手もことごとく暗くらんじてしまつているが、あの検校と婦人の席までこれをたしかに聞いた記憶おぼが存ぞんしているのは、何かしらこの文句ぶんくの中に頑がん是ぜない幼ようど童うの心こころを感かん銘めいさせるものがあつたに違ちがひない。

もともと地唄じうたの文句ぶんくには辻つじ褌つまの合あわぬところや、語法ごぽうの滅め茶ちやく苦く茶ちやくなどころが多くて、殊ことさら更さら意味いを晦かい渋じゆうにしたのかと思われおもるものがたくさんある。それに謡曲うたや浄瑠璃じやうるりの故こ事じを踏ふまえていいるのなぞは、その典てん拠きよを知らしらないではななおおささらら解かい釈しやくに苦くしむし訳やく

で、「狐こんかい噲」の曲も大方別にもと基づくところがあるのであろう。しかし「いたわしや母上は花の姿に引き替えて」と云い、「母も招けばうしろみ返りて、さらばと云わぬばかりにて」と云い、逃にげて行く母を恋こい慕したう少年の悲しみの籠こもつていることが、当時の幼いとけない自分にも何とはなしに感ぜられたと見える。その上「野越え山越え里打ち過ぎて」と云い、「あの山越えてこの山越えて」と云う詞には、どこか子守唄こもりうたに似た調子もある。そしてどう云う連想の作用か、「狐こんかい噲」と云う文字も意味も分るはずはなかつたのに、そのち幾いくたびかこの曲を耳にするに随したがつて、それが狐きつねに關係のあるらしいことを、おぼろげながら悟さとるようになった。これは多分、しばしば祖母に連れられて文楽座ぶんらくざや堀江座ほりえざの人形

芝居へ行つたものだから、そんな時に見た葛くずの葉はの子別れの場が頭に沁しみ込こんでいたせいであろう。あの、母狐が秋の夕ぐれに障し子ようじの中で機はたを織たっている、とんからり、とんからりと云う箴おさの音。それから寝ねている我が子に名残なごりを惜おしみつつ「恋こいしくば訪ね来てみよ和泉いずみなる——」と障子へ記すあの歌。——ああ云う場面が母を知らない少年の胸うつつたに訴うえる力は、その境きようぐう遇うの人でなければ恐おそらく想像おぼも及およばまい。自分は子供ながらも、「我が住む森に帰らん」と云う句、「我が思う思う心のうちは白菊岩びくぎ隠れ蔦つたがくれ、篠の細道搔かき分け行けば」などと云う唄のふしのうちに、色とりどりの秋の小径こみちを森の古巢ふるすへ走つて行く一匹びきの白び狐やっこの後影を認め、その跡しとを慕しとうて追いかける童子どうじの身の上を自



分に引きくらべて、ひとしお母恋いしさの思いに責められたのであろう。そう云えば、しのだ信田の森は大阪の近くにあるせいか、昔から葛の葉を唄った童謡どうようが家庭の遊戯ゆうぎと結び着いて幾種類か行われているが、自分も二つばかり覚えているのがある。その一つは、釣つろうよ、釣つろうよ

### 信田の森の

狐どんを釣つろうよ

と唄いながら、一人が狐になり、二人が獵かりうど人になつて輪を作つた紐ひもの両端を持つて遊ぶ狐釣りの遊戯である。東京の家庭にもこれに似た遊戯があると聞いて、自分はかつてある待まちあ合で芸者にやらせて見たことがあるが、唄の文句も節廻しも大阪のとはやや

違う。それに遊戯する者も、東京ではすわったままだけれども、大阪では普通立ってやるので、狐になった者が、唄につれておどけた狐の身振みぶりをしながら次第に輪の側へ近づいて来るのが、——  
——たまたまそれが艶えんな町娘や若い嫁よめであつたりすると、殊ことに可愛かわいい。少年の時、正月の晩などに親戚の家へ招かれてそんな遊びをした折に、あるあどけない若女房わかにようぼうで、その狐の身振みぶりが優すぐれて上手な美しい人があつたのを、今に自分は忘れずにいるくらいである。なおもう一つの遊戯は、大勢が手をつなぎ合つて円座を作り、その輪のまん中へ鬼おにをすわらせる。そして豆のような小さな物を鬼に見せないように手の中へ隠かくして、唄をうたいつつ順々に次の人の手へ渡して行き、唄が終ると皆みなじつと動かずにいて、誰

の手の中に豆があるかを鬼に中あてさせる。その唄の詞はこう云うのである。

麦つ摘ウんで

蓬よもぎ摘ウんで

お手にお豆がこウこのつ

九このウつの、豆の数より

親の在所が恋いしゆうて

恋いしイくば

訪ね来てみよ

信田のもウりのうウらみ葛くずの葉は

自分はこの唄にはほのかながら子供こどもの郷きょう愁しゆうがあるのを感じる。

大阪の町方には、河内かわち、和泉いずみ、あの辺の田舎いなかから年期奉公ほうこうに来  
 ている丁稚でっちや下女が多いが、冬の夜寒よさむに、表の戸を締めしめて、そう  
 云う奉公人共ほうこうにんどもが家族の者たちと火鉢ひばちのぐるりに団居まといしながら  
 この唄をうたつて遊ぶ情景は、船場せんばや島の内あたりに店を持つ町ま  
 家ちやにしばしば見受けられる。思うに草深い故郷を離れて、商法や  
 行儀ぎようぎを見習いに来ている子弟等らは、「親の在所が恋いしゆうて」  
 と何気なく口ずさむうちにも、茅葺かやぶきの家の薄暗い納戸なんどにふせる  
 父母の倂おもかげを偲しのびつつあったであろう。自分は後世、忠臣蔵の六段  
 目で、あの、深編笠ふかあみがさの二人侍が訪ねて来るところで、この唄を  
 下座げざに使づっているのを図らずも聴いたが、与市兵衛よいちべえ、おかや、お  
 軽きんなどの境涯きようがいと、いかにも取り合わせの巧うまいのに感心した。

当時、島の内の自分の家にも奉公人が大勢いたから、自分は彼等がああの唄をうたつて遊ぶのを見ると、同情もし、また羨ましくもあつた。父母の膝ひざもと二元を離れて他人の所に住み込んでいるのは可哀わいそうだけでも、奉公人たちはいつでも国へ帰りさえすれば、会うことの出来る親があるのに、自分にはそれがないのである。そんなことから、自分は信田の森へ行けば母に会えるような気がして、たしか尋じんじょう常二三年の頃、そつと、家には内証で、同級生の友達を誘つてあそこまで出かけたことがあつた。あの辺へんは今でも南海電車を降りて半里も歩かねばならぬ不便な場所で、その時分は途中まで汽車があつたかどうか、何でも大部分ガタ馬車に乗つて、よほど歩いたように思う。行つてみると、楠くすのきの大木の森

の中に葛の葉いなり稻荷ほこらの祠が建つていて、葛の葉姫ひめの姿見の井戸と云うものがあつた。自分は絵馬堂えまどうに掲かかげてある子別れの場の押絵おしえの絵馬や、雀右衛門じゃくえもんか誰かの似顔絵の額なを眺ながめたりして、わずかになくさ慰なぐさめられて森を出たが、その帰り路に、ところどころの百ひやく姓しやう家やの障子の蔭かげから、今もとんからり、とんからりと機はたを織たる音が洩もれて来るのを、この上もなくなつかしく聞いた。多分あの沿道かわちもめんは河内木棉はたやの産地だったので、機屋あこががたくさんあつたのである。とにかくその昔はどれほど自分の憧あこがれを充みたしてくれたか知れなかつた。

しかし自分が奇異に思うことは、そう云う風に常に恋こい慕したつたのは主として母の方であつて、父に対してはさほどでもなかつた一

事である。そのくせ父は母より前に亡くなっていたから、母の姿は万一にも記憶に存する可能性があつても、父のは全くないはずであつた。そんな点から考えると、自分の母を恋うる気持はただ漠然たる「未知の女性」に対する憧憬、——つまり少年期の恋愛の萌芽と関係がありはしないか。なぜなら自分の場合には、過去に母であつた人も、将来妻となるべき人も、等しく「未知の女性」であつて、それが眼に見えぬ因縁の糸で自分に繋がっていることは、どちらも同じなのである。けだしこう云う心理は、自分のような境遇でなくとも、誰にも幾分か潜んでいるだろう。その証拠にはあの狐嚙の唄の文句なども、子が母を慕うようでもあるが、「来るは誰故ぞ、様故」と云い、「君は帰

るか恨めしやのうやれ」と云い、相愛の男女の哀別離苦をうたつているようでもある。恐らくこの唄の作者は両方の意味に取れるようにわざと歌詞を曖昧あいまいにぼかしたのではないか。いずれにせよ自分は最初にあれを聞いた時から、母ばかりを幻まぼろしに描いていたとは信じられない。その幻は母であると同時に妻でもあったと思う。だから自分の小さな胸の中にある母の姿は、年老いた婦人ではなく、永久に若く美しい女であった。あの馬方うまかたさんきち三吉の芝居に出て来るお乳ちひとの人の重しげの井い、——立派な桂襠うちかけを着て、大名の姫ひめぎみ君に仕えている花やかな貴婦人、——自分の夢に見る母はあの三吉の母のような人であり、その夢の中で自分はしばしば三吉になっていた。



徳川時代の狂言作者は、案外ずるく頭が働いて、観客の意識の底に潜在せんざいしている微妙びみょうな心理に媚こびることが巧たくみであったのかも知れない。この三吉の芝居なども、一方を貴族の女の児こにし、一方を馬方の男の児にして、その間に、乳母うぼであり母である上じょうろう 臈らうの婦人を配したところは、表面親子の情愛を扱あつかったものに違ちがいなければ、その蔭あわに淡あわい少年の恋こいが暗示あかしされていなくもない。少くとも三吉の方から見れば、いかめしい大名の奥御おくご殿んに住む姫君と母とは、等ひとしく思慕しほの対象たいしょうになり得る。それが葛の葉の芝居では、父と子とが同じ心になつて一人の母を慕うのであるが、この場合、母が狐であると言う仕組みは、一層見る人の空想を甘くする。自分はいつも、もしあの芝居のように自分の

母が狐であつてくれたらばと思つて、どんなに安倍あべの童子を羨んだか知れない。なぜなら母が人間であつたら、もうこの世で会える望みはないけれども、狐が人間に化けたのであるなら、いつか再び母の姿を仮かりて現れない限りもない。母のない子供があつて居を見れば、きつと誰でもそんな感じを抱いだくであろう。が、千本桜みちゆきの道行になると、母——狐——美女——恋人——と

云う連想がもつと密接である。ここでは親も狐、子も狐であつて、しかも静と忠信狐とは主従のごとく書いてありながら、やはり見た眼は恋人同士の道行と映えいずるように工たくまれている。そのせいか自分は最もこの舞踊劇ぶようげきを見ることを好んだ。そして自分を忠信狐になぞらえ、親狐の皮で張られた鼓の音に惹ひかされて、吉野山

の花の雲を分けつつ静御前の跡を慕って行く身の上を想像した。自分はせめて舞を習つて、おんしゅうかい温習会の舞台の上でも忠信になりたいと、そんなことを考えたほどであつた。

「だがそれだけではないんだよ」

と、津村はそこまで語つて来て、早や暮れかかつて来た対岸の菜摘の里の森影を眺めながら、

「自分は今度、ほんとうに初音の鼓に惹き寄せられてこの吉野まで来たようなものなんだよ」

と、そう云つて、そのぼんちらしい人の好い眼もとに、何か私には意味の分らない笑いを浮かべた。

その五 国栖くす

さてこれからは私が間接に津村の話を取り次ぐとしよう。

そう云う訳で、津村が吉野と云う土地に特別のなつかしきを感じるのは、一つは千本桜の芝居の影響によるのであるが、一つには、母は大和の人だと云うことをかねがね聞いていたからであつた。

が、大和のどこから貰もらわれて来たのか、その実家は現存しているのか等のことは、久しく謎なぞに包まれていた。津村は祖母の生前に出来るだけ母の経歴を調べておきたいと思つて、いろいろ尋ねたけれども、祖母は何なにぶん分にも忘れてしまったと云うことで、はかばかしい答は得られなかつた。親類の誰彼、伯父おじ伯母おばなどに聞い

てみても、母の里方さとかたについては、不思議に知っている者がなかった。ぜんたい津村家は旧家であるから、あたりまえなら二代も三代も前からの縁者が出入りしているはずであるが、母は実は、大和からすぐ彼の父に嫁とついだのでなく、幼少の頃大阪の色町へ売られ、そこからいったん然しかるべき人の養女になって輿こし入れをしたらしい。それで戸籍面こせきの記載きざいでは、文久三年に生れ、明治十年に十五歳で今橋三丁目浦門喜十郎の許もとから津村家へ嫁とつぎ、明治二十四年に二十九歳で死亡している。中学を卒業する頃の津村は、母に関してようようこれだけのことしか知らなかった。後から考えれば、祖母や親戚の年寄たちが余り話してくれなかったのは、母の前身が前身であるから、語るを好まなかったのであろう。しか

し津村の気持では、自分の母が狭斜きょうしやの巷ちまたに生い立った人である  
と云う事實は、ただなつかしさを増すばかりで別に不名誉ふめいよとも  
不愉快ふゆかいとも感じなかつた。まして縁づいたのが十五の歳としであると  
すれば、いかに早婚そうこんの時代だとしても、恐らく母はそういう社  
界の汚れに染まる度も少く、まだ純真むすめな娘らしさを失つていなか  
つたであらう。それなればこそ子供を三人も生んだのであらう。  
そして初々ういういしい少女の花嫁はなよめは、夫の家に引き取られて旧家の  
主婦たるにふさわしいさまざまな躰しつけを受けたであらう。津村はか  
つて、母が十七八の時に手写したと云う琴唄の稽古本けいこほんを見たこ  
とがあるが、それは半紙を四つ折りにしたものへ横に唄の詞を列つら  
ね、行間ぎようかんに琴の譜ふを朱しゆで丹念たんねんに書き入れてある、美しいお

家流いへりゆうの筆蹟ひつせきであつた。

そののち津村は東京へ遊学したので、自然家庭と遠ざかることになつたが、そのあいだも母の故郷を知りたい心はかえつて募つる一方であつた。有りていに云うと、彼の青春期は母への思慕しほで過くされたと云つてよい。行きずりに遇あう町の女、令嬢れいじよう、芸者、女優、——などに、淡あわい好奇心を感じたこともないではないが、いつでも彼の眼に止まる相手は、写真で見る母の倂おもかけにどこか共通な感じのある顔の主ぬしであつた。彼が学校生活を捨てて大阪へ歸つたのも、あながち祖母の意に従つたばかりでなく、彼自身があこがれの土地へ、——母の故郷に少しでも近い所、そして彼女がその短かい生しょうがい涯がいの半分を送つた島の内の家へ、——惹き寄

せられたためなのである。それに何と云つても母は関西の女であるから、東京の町では彼女に似通つた女に会うことが稀だけけれども、大阪にいと、ときどきそう云うのに打ぶつかる。母の生い育つたのはただ色町と云うばかりで、いずこの土地とも分らないのが恨みであつたが、それでも彼は母の幻まぼろしに会うために花柳界かりゆうかいの女に近づき、茶屋酒に親しんだ。そんなことから方々に岡惚おかぼれを作つた。「遊ぶ」と云う評判も取つた。けれども元来が母恋いしさから起つたのに過ぎないのだから、一いっぺん遍も深入りをしたことはなく、今日まで童貞どうていを守り続けた。

こうして二三年を過すうちに祖母が死んだ。

その、祖母が亡くなつた後のある日のことである。形見の品を整



理しようと思つて土蔵の中の小袖箆笥こそでだんす ひきだの抽出しを改めていると、  
 祖母の手蹟しゆせきらしい書類まじに交つて、ついぞ見たことのない古い書  
 付けや文反古ふみほぐが出て来た。それはまだ母が勤め奉公時代に父と母  
 との間に交された艶書えんしょ、大和の国の実母らしい人から母へ宛あて  
 た手紙、琴、三味線、生け花、茶の湯等の奥許おくゆるしの免状めんじょうな  
 どであつた。艶書は父からのものが三通、母からのものが二通、  
 初恋に酔よう少年少女のたわいのない睦言むつごとの遣り取りやとに過ぎない  
 けれども、互たがいに人目を忍しのんでは首尾しゆいしていたらしい様子合あいも見  
 え、殊に母のものは「……………おろかなりし心より思し召おほめしをかえ  
 りみず文さし上あげ候そうろうこなた心少しは御汲おんくみ分け……………」とか  
 「ひとかたならぬ御事のみ仰おおせくだ下くだされなんぼうか嬉うれしくぞんじ

色々耻はずかしき身の上までもお咄はなし申上げ……」とか、十五の女の  
 児にしては、筆の運びこそたどらしいものの、さすがにませた  
 言葉づかいで、その頃の男女の早そうじゆく熟じゆくさが思いやられた。次に  
 故郷の実家から寄越したのは一通しかなく、宛名あてなは「大阪市新町  
 九軒粉川様内おすみどの」とあり、差出人は「大和国吉野郡国栖  
 村窪垣くぼかいと内昆布助左衛門内」となっていて、「此度そのみ其身の孝心を  
 かんしん致いたし候ゆえ文して申遣もうしつかわし参らせ候左候そろさそうらえば日にまし  
 寒さに向い候え共どもいよいよかわらせなく相くらされこのかたも安  
 心おりいたし居候ととさんと申もうしかかささんと申誠まことに誠まことに難ありがたく有……」  
 と云うような書き出しで、館やかたの主人を親とも思い大切にせねばな  
 らぬこと、遊芸のけいこに身を入れること、人の物を欲しがって

はならぬこと、神仏を信心することなど、教訓めいたことのかず  
 かずが記してあつた。

津村は土蔵の埃ほこりだらけな床の上にすわつたまま、うす暗い光線で  
 この手紙を繰くり返かえし読んだ。そして気がついた時分には、いつか  
 日が暮れていたので、今度はそれを書齋へ持つて出て、電燈の下  
 にひろげた。むかし、恐らくは三四十年も前に、吉野郡国栖村の  
 百姓家で、行燈あんどんの灯影ほかげにうづくまりつつ老眼の脂やにを払い払い娘  
 のもとへこまごまと書き綴つづつていたのであろう老嫗ろうおうの姿が、その  
 二ふたひろにも余る長い巻紙の上に浮かんだ。文ふみの言葉や仮名づか  
 いには田舎の婆ばばが書いたらしい覚おぼつかないふしぶしも見えるけれ  
 ども、文字はそのわりに拙ますくなく、お家流の正しい崩くずし方で書い

てあるのは、満まんざら更みずのの水呑み百姓でもなかつたのであろう。が、何か暮らし向きに困る事情が出来て、娘を金に替かえたのであることは察せられる。ただ惜しいことに十二月七日とあるばかりで、年号が書き入れてないのだが、多分この文は娘を大阪へ出してからの最初の便びんであろうと思われる。しかしそれでも老い先短かい身の心細く、ところどころに「これかかさんのゆい言ぞや」とか、「たとえこちらがいのちなくともその身に付しゅつせいをいたさせ候間」などと云う文句が見え、何をしてはならぬ、彼かをしてはならぬと、いろいろと案じ過して論ざとしている中にも、面白いのは、紙を粗末にせぬようにと、長々と訓くんかい戒かいを述べて、「此このかみもかかさんとおりのすきたる紙なりかならずかならずはだみはなさ

ず大せつにおもうべし其身そのはよろずぜいたくにくらせどもかみを粗末にしてはならぬぞやかかさんもおりとも此このかみをすくときはひびあかぎれに指のさきちぎれるようにてたんとたんと苦くろういたし候」と、二十行にも亘わたつて書いていることである。津村はこれによつて、母の生家が紙すきを業としていたのを知り得た。それから母の家族の中に、姉か妹であるらしい「おりと」と云う婦人のあることが分つた。なおその外に「おえい」と云う婦人も見えて、「おえいは日々雪のつもる山に葛くずをほりに行き候そうろうみなしかせぎためろぎん出来候そうらえば其身にあいに参り候たのしみいにくれられよ」とあつて、「子をおもうおやの心はやみ故ゆえにくらがり峠とうげのかたぞこいしき」と、最後に和歌が記されていた。

この歌の中にある「くらがり峠」と云う所は、大阪から大和へ越える街道にあつて、汽車がなかつた時代には皆その峠を越えたのである。峠の頂上に何とか云う寺があり、そこがほととぎすの名所になつていたから、津村も一度中学時代に行ったことがあつたが、たしか六月頃のある夜の、まだ明けきらぬうちに山へかかつて、寺でひと休みしていると、<sup>あかつき</sup>暁の四時か五時頃だつたらう、障子の外がほんのり白み初めたと思つたら、どこかうしろの山の方で、不意に一と声ほととぎすが啼いた。<sup>な</sup>するとつづいて、その同じ鳥か、別なほととぎすか、<sup>ふ</sup>二た声も三声も、——しまいには珍しくもなくなつたほど啼きしきつた。津村はこの歌を読むと、ふと、あの時は何でもなく聞いたほととぎすの聲が、急にたまら

なくなつかしいものに想い出された。そして昔の人があの鳥の啼く音を故人の魂たましいになぞらえて、「蜀魂しよつこん」と云い「不如歸ふじよき」と云つたのが、いかにももつともな連想であるような気がした。

しかし老婆の手紙について津村が最も奇あやしい因縁を感じたことが外にあつた。と云うのは、この婦人、——彼の母方の祖母にあたる人は、その文の中に狐のことをしきりに説いているのである。「……ずいぶんずいぶんこれからは御屋おやしろの稲荷いなりさまと白びやく狐この命婦みようぶ之進のしんとをまいにちまいにちあさあさは拝むべし左候さそうらえはそちの知ておる通りととさんがよべば狐のあのようによべへくるようになるもみないつしんの有る故なり……」とか、

「それゆえこのたびのなんもまったく白狐さまのお蔭かげとぞんじ参

らせ候是これからは其御内そのおんうちの武運長久あしきやまいなきよきのきとう毎日毎日致し参らせ候随ずいぶん分随分と信心なされるべく……」とか、そんなことが書いてあるのを見ると、祖母の夫婦はよほど稲荷の信仰に凝り固まっていたことが分る。察するところ「御屋しろの稲荷さま」と云うのは、屋敷のうちに小さな祠ほこらでも建てて勧進してあつたのではないか。そしてその稲荷のお使いである「命婦之進」と云う白狐も、どこかその祠の近くに巢を作つたのではないか。「そちの知ておる通りととさんがよべば狐のあのようにそばへくるようになるも」とあるのは、本当にその白狐が祖父の声に応じて穴から姿を現わすのか、それとも祖母になり祖父自身になり魂が乗り移るのか明かでないが、祖父なる人は狐



を自由に呼び出すことが出来、狐はまたこの老夫婦の蔭に附添い、  
一家の運命を支配していたように思える。

津村は「此<sup>この</sup>かみもかかさんとおりとこのすきたる紙なりかならずか  
ならずはだみはなさず大せつにおもうべし」とあるその巻紙を、  
ほんとうに肌身<sup>はだみ</sup>につけて押し戴<sup>おいた</sup>いた。少くとも明治十年以前、母  
が大阪へ売られてから間もなく寄越<sup>よこ</sup>された文だとすれば、もう三  
四十年は立っているはずのその紙は、こんがりと遠火<sup>とおび</sup>にあてたよ  
うな色に変わっていたが、紙質は今のものよりもきめが緻密<sup>ちみつ</sup>で、し  
っかりしていた。津村はその中を通っている細かい丈<sup>じょうぶ</sup>夫<sup>ふ</sup>な織<sup>せん</sup>維<sup>い</sup>  
の筋を日に透<sup>す</sup>かして見て、「かかさんもおりとも此<sup>この</sup>かみをすくと  
きはびびあかぎれに指のさきちぎれるようにてたとたとと苦ろ

ういたし候」と云う文句を想い浮かべると、その老人の皮膚にも似た一枚の薄い紙片の中に、自分の母を生んだ人の血が籠っているのを感じた。母も恐らくは新町の館でこの文を受け取った時、やはり自分が今したようにこれを肌身につけ、押し戴いたであろうことを思えば、「昔の人の袖の香ぞする」その文殻は、彼には二重に床しくも貴い形見であつた。

その後津村がこれらの文書を手がかりとして母の生家を突きとめるに至つた過程については、あまり管々しく書くまでもなからう。何しろその当時から三四十年前と云えば、ちようど維新前後の変動に遭遇しているのだから、母が身売りをした新町九軒の粉川と云う家も、輿入れの前に一時籍を入れていた今橋の浦門と

云う養家も、今では共に亡びてしまつて行くえが分らず、奥許しの免めんじょう状じょうに署名している茶の湯、生け花、琴三味線等の師匠ししやうの家筋も、多くは絶えてしまつていたので、結局前に挙げた文を唯一の手がかりに、大和の国吉野郡国栖村へ尋ねて行くのが近道であり、またそれ以外に方法もなかつた。それで津村は、自分の家の祖母が亡くなつた年の冬、百ヶ日の法要を済ますと、親しい者にも其の目的は打ち明けずに、ひとり飄ひようぜん然ぜんと旅おもむに赴ていく体さ裁いで、思い切つて国栖村へ出かけた。

大阪と違つて、田舎はそんなに劇はげしい変遷へんせんはなかつたはずである。まして田舎も田舎、行きどまりの山奥に近い吉野郡の僻地へきちであるから、たとい貧しい百姓家であつてもわずか二代か三代の間

にあとかたもなくなくなるようなことはあるまい。津村はその期待に胸を躍おどらせつつ、晴れた十二月のある日の朝、上かみい市いちから俵くるまを雇やとつて、今日私たちが歩いて来たこの街道を国栖へ急がせた。そしてなつかしい村の人家が見え出したとき、何より先に彼の眼を惹ひいたのは、ここかしこの軒下に乾してある紙であった。あたかもりようしまち漁師町で海苔のりを乾すような工合に、長方形の紙が行儀よく板に並べて立てかけてあるのだが、その真つ白しきしな色紙を散らしたようなのが、街道の両側や、丘の段々の上などに、高く低く、寒そうな日にきらきらと反射しつつあるのを眺めると、彼は何がなしに涙が浮かんだ。ここが自分の先祖の地だ。自分は今、長いあいだ夢に見ていた母の故郷の土を踏ふんだ。この悠ゆうきゆう久きゆうな山間の村里

は、大方母が生れた頃も、今眼の前にあるような平和な景色をひろげていただろう。四十年前の日も、つい昨日の日も、ここでは同じに明け、同じに暮れていたのだらう。津村は「昔」と壁ひと重の隣りへ来た気がした。ほんの一瞬间、眼をつぶって再び見開けば、どこかその辺の籬の内に、母が少女の群れに交って遊んでいるかも知れなかった。

最初の彼の予想では、「昆布」は珍しい姓であるからじきに分ることと思っていたのだが、窪垣内と云う字へ行つて見ると、そこには「昆布」の姓が非常に多いので、目的の家を捜し出すのになかなか埒が明かなかつた。仕方がなく車夫と二人で昆布姓の家を一軒々々尋ねたけれども、「昆布助左衛門」を名乗る者は、昔

は知らず、今は一人もいないと云う。ようようのことで、「それならあそこかも知れない」と、とある駄菓子屋だがしやの奥から出て来た古老らしい人が縁先に立って指さしてくれたのは、街道の左側の、小高い段の上に見える一と棟むねの草屋根であつた。津村は車夫を菓子屋の店先に待たして置いて、往来からだらだらと半町ばかり引つ込んだ爪つまさき先上りの丘の路を、その草屋根の方へ登つて行つた。めつきりと冷える朝ではあつたが、そこはうしろになだらかな斜しやめん面やめんを持った山を繞めぐらした、風のあたらない、なごやかな日だまりになつた一廓いっかくで三四軒の家がいずれも紙をすいていた。坂を登つて行く津村は、それらの丘の上の家々から若い女たちがちよつと仕事の手を休めて、この辺に見馴みなれない都会風の青年紳士しんしが

上つて来るのを、珍めづらしそうに見おろしているのに気づいた。紙をすくのは娘や嫁よめの手業てわざになつてゐるらしく、庭先に働いてゐる人たちはほとんど皆手拭みなてぬぐいを姐ねえさん被かぶりにしてゐた。津村はその、紙や手拭いの冴さえ冴えとした爽さわやかな反射の中を、教えられた家の軒近く立つた。見ると、標札には「昆布由松」とあつて、助左衛門と云う名は記してない。母家おもやの右手に、納屋なやのような小屋が建つていて、その板敷の上に十七八になる娘がつくばいながら、米の研とぎ汁のような色をした水の中へ両手を漬つけて、木きの杵わくを篩ふるつてはさつと搦すくい上げている。杵の中の白い水が、蒸籠せいろうのように作つてある簾すだれの底へ紙の形に沈ちんでん澱すると、娘はそれを順繰りに板敷に並べては、やがてまた杵を水の中へ漬ける。表へ向いた

小屋の板戸が明いているので、津村はひと叢むらの野菊のすがれた垣か根きねの外たはずにイみながら、見る間に二枚三枚と漉すいて行く娘のあざやかな手際てぎわを眺めた。姿はすらりとしていたが、田舎娘らしくがっしりと堅かたぶと太りした、骨ほねぶと太な、大柄な児こであった。その頬ほおは健康そうに張り切つて、若さでつやつやしていたけれども、それよりも津村は、白い水に浸ひたっている彼女の指に心を惹ひかれた。なるほど、これでは「ひびあかぎれに指のさきちぎれるよう」なもの道理である。が、寒さにいじめつけられて赤くふやけている傷いたい々たしいその指にも、日増しに伸びる歳頃の発育の力を抑おさえきれないものがあつて、一種いじらしい美しさが感じられた。

その時、ふと注意を転じると、母家の左の隅の方に古い稲荷ほこらの祠



のあるのが眼に這<sup>はい</sup>入った。津村の足は思わず垣根の中へ進んだ。そしてさつきから庭先で紙を乾していたこの家の主婦らしい二十四五の婦人の前へ寄つて行つた。

主婦は彼から来意を聞かされても、あまりその理由が唐突<sup>とうとつ</sup>なのでしばらく遲疑<sup>ちぎ</sup>する様子であつたが、証拠の手紙を出して見せると、だんだん納得が行つたらしく、「わたしでは分りませんから、年寄に会つて下さい」と、母家の奥にいた六十恰<sup>かつこう</sup>好の老媪を呼んだ。それがあの手紙にある「おりと」——津村の母の姉に当る婦人だったのである。

この老媪は彼の熱心な質問の前にオドオドしながら、もう消えかかった記憶の糸を手繰<sup>たぐ</sup>り手繰り歯の抜けた口から少しずつ語つた。

中には全く忘れていて答えられないこと、記憶ちがいと思われること、遠慮<sup>えんりよ</sup>して云わないこと、前後矛盾<sup>むじゆん</sup>していること、何かもぐもぐと云うには云つても息の洩<sup>も</sup>れる声が聴き取りにくく、いくら問い返しても要領を掴<sup>つか</sup>めなかつたことなどがたくさんあつて、半分以上はこちらが想像で補うより外<sup>ほか</sup>はなかつたが、とにかくそう云う風にしてでも津村が知り得た事柄は、母に関する二十年来の彼の疑問を解くに足りた。母が大阪へやられたのは、たしか慶<sup>けい</sup>応<sup>いおう</sup>頃だつたと婆<sup>ばあ</sup>さんは云うのだけれども、ことし六十七になる婆さんが十四五歳、母が十一二歳の時だつたそうであるから、明治以後であることは云うまでもない。それゆえ母はわずか二三年、多くも四年ほど新町に奉公<sup>ほうこう</sup>しただけで、じきに津村家へ嫁<sup>とつ</sup>いだこ

とになる。おりと婆さんの口吻くちふりから察するのにも、昆布の家は当時窮迫きゆうはくこそしていたものの、相当に名聞を重んずる旧家で、そんな所へ娘を勤めに出したことをなるべく隠していたのである。それで娘が奉公中はもちろんのこと、立派な家の嫁になつた後までも、一つには娘の耻はじ、一つには自分たちの耻と思つて、あまり行き来きをしなかつたのであろう。また、実際にその頃の色里の勤め奉公は、芸妓げいぎ、遊女、茶屋女、その他何であるにしろ、いったん身売りの証文に判をついた以上、きれいに親許おやもとと縁えんを切るのが習慣であり、その後の娘はいわゆる「喰焼奉公人」として、どう云う風に成り行こうとも、実家はそれに係り合う権利がなかつたでもあろう。しかし婆さんのおぼろげな記憶によると、

妹が津村家へ縁づいてから、彼女の母は一度か二度、大阪へ会いに行つたことがあるらしく、今では大家の御料人様たいけごりようになんさんに出世した結構結構ずくめの娘の身の上を驚異をもつて語つていた折があつた。そして彼女にも是非大阪へ出て来るようにと言つてを聞いたけれども、そんな所へ見すばらしい姿で上れるはずもなし、妹の方もあれなり故郷を訪れたことがなかつたので、彼女はついで成人してからだんなの妹と云うものを知らずにいるうち、やがてその旦那様だんなが死に、妹が死に、彼女の方の両親も死に、もうそれからはなおさら津村家との交通が絶えてしまった。

おりと婆さんはその肉親の妹、——津村の母のことを呼ぶのに「あなた様のお袋さまふくろ」と云う廻りくどい言葉を用いた。それは

津村への礼儀からでもあつたらうが、事によると妹の名を忘れて  
いるのかも知れなかつた。「おえいは日々雪のふる山に葛くずをほり  
に行き候そうろう」とあるその「おえい」と云う人を尋ねると、それが総  
領娘で、二番目がおりと、末娘が津村の母のおすみであつた。が、  
ある事情から長女のおえいが他家へ縁づき、おりとが養子を迎え  
て昆布の跡を継いだ。そして今ではそのおえいもおりとの夫も亡  
くなつて、この家は息子の由松の代になり、さつき庭先で津村に  
応待した婦人がその由松の嫁であつた。そう云う訳で、おりとの  
母が存生の頃はすみ女に関する書類や手紙なども少しは保存して  
あつたはずだが、もはや三代を経た今日となつては、ほとんどこ  
れと云う品も残っていない。——と、おりと婆さんはそう語つ

てから、ふと思ひ出したように、立つて仏壇ぶつだんの扉とびらを開いて、位牌はいの傍はらに飾つてあつた一葉いちようの写真を持つて来て示した。それは津村も見覚えのある、母が晩年に撮影した手札型の胸像で、彼もその複写の一枚を自分のアルバムに所蔵しているものであつた。

「そう、そう、あなた様のお袋さまの物は、——」

と、おりと婆さんはそれからまた何かを思ひ出した様子で附け加えた。

「この写真の外ほかに、琴ことが一面いっぺんございました。これは大阪の娘の形見だと申して、母が大切にしておりましたが、久しく出しても見ませぬので、どうなつておりますやら、……………」

津村は、二階の物置きを捜さがしたらあるだろうと云うその琴を見せ

て貰うために、畑へ出ていた由松の帰りを待った。そしてその隙ひまに近所で昼食をしたため来てから、自分も若夫婦に手を貸して、埃ほこりの堆うずたかい嵩張かさばった荷物を明るい縁先へ運び出した。

どうしてこんな物がこの家に伝わっていたのであろう、——色いろ褪ろあせた覆おおいの油单ゆたんを払うと、下から現れたのは、古びてこそいるが立派な蔘まきえ絵の本間ほんけんの琴であった。蔘絵の模様は、甲こうを除いたほとんど全部に行き亘わたつていて、両側の「磯いそ」は住すみ吉よしの景色けしきであるらしく、片側に鳥居とりいと反橋そりはしとが松林の中に配してあり、片側に高燈籠たかどうろうと磯馴そなれのまつ松と浜辺の波が描いてある。「海」から「竜角りゆうかく」「四分六」のあたりには無数の千鳥ちどりが飛んでいて、「荻布おぎぬの」のある方、「柏葉かしわば」の下に五色の雲と天人の姿が透す

いて見える。そしてそれらの蒔絵や絵の具の色は、桐きりの木き地じが時代を帯びて黒ずんでいるために、一層上品な光しずを沈しずませて眼を射るのである。津村は油単ちりの塵ぬぐを拭ぬぐつて、改めてその染め模様を調べた。地質は多分塩瀬しおぜであろう、表は上の方へ紅地に白く八重梅やえうめの紋もんを抜き、下の方に唐美人からが高楼たかに坐ざして琴を弾だんじている図がある。楼の柱の両側に「二十五絃げん弾月夜」「不堪清怨却飛来」と、一對の聯れんが懸かかっている。裏は月に雁かりの列を現かたわした傍わらに「雲みちによそえる琴の柱をはつらなる雁とおもいける哉かな」と云う文字が読めた。

しかしそれにしても、八重梅は津村家の紋でないのであるが、養家の浦門家の紋か、あるいはひよつとすると、新町やかたの館かたの紋では



なかつたのであろうか。そして津村家へ嫁ぐについて、不用になつた色町時代の記念の品を郷里へ贈つたのではないか。恐らくその時分、実家の方に年頃の娘かなんぞがいて、その児このために田舎の祖母が貰い受けたと云うことも考えられる。またそうでもなく、嫁いでもからも長く島の内の家にあつたのを、彼女の遺言か何かによつて国くに元もとへ届けたとも想像される。が、おりと婆さんも若夫婦も、一向その間の事情に関して知るところはなかつた。たしか手紙のようなものが附ついていたと思うけれども、今ではそれも見あたらぬ、ただ「大阪へやられた人」から譲ゆずられたものであることを聞き覚えている、と云うのみであつた。

別に、附属品を収めた小型の桐の匣はこがあつて、中に琴柱ことじと琴爪ことづめ

とが這入つていた。琴柱は黒つぽい堅木かたぎの木地で、それにも一つ松竹梅しょうちくばいの蒔絵がしてある。琴爪の方は、大分使い込まれたらしく手て擦すれていたが、かつて母のかぼそい指が箝はめたであらうそれらの爪を、津村はなつかしさに堪えず自分の小指にあててみた。幼少の折、奥のひと間で品のよい婦人と検校けんぎょうとが「狐こ噺ばい」を弾いていたあの場面が、一瞬間彼の眼交まなかいを掠かすめた。その婦人は母ではなく、琴もこの琴ではなかったかも知れぬけれども、大方母もこれを掻かき鳴ならしつつ幾度かあの曲を唄うたったであろう。もし出来るならば自分はこの樂器を修繕しゅうぜんさせ、母の命日に誰だれか然しかるべき人を頼たのんで「狐噺」の曲を弾かせてみたい、と、その時から津村はそう思いついた。庭の稻荷ほこらの祠ほこらについては守り

神として代々祭つて来たのであるから、若夫婦たちもその手紙にあるものに相違ないことを確かめてくれた。もつとも現在では家族の内に狐を使う者はいない。由松が子供の頃、お祖父じいさんがよくそんなことをしたと云う噂うわさを聞いたが、「白狐の命婦みょうぶのしん之進」  
 とやはらはいつの代にか姿を現わさないようになり、祠のうしろにある椎しいの木の蔭かげにむかし狐が棲すんでいた穴が残っているばかりで、そこへ案内をされた津村は、穴の入口に今は淋さびしく注連縄しめなわが渡してあるのを見た。

—— 以上の話は、津村の祖母が亡くなった年のことであるから、  
 宮みや滝たきの岩の上で彼が私に語った時からはまだ二三年前さかのぼに溯さかのぼる事  
 実である。そして彼がこの間中から私への通信に「国栖くすの親戚しんせき」

と書いて来たのは、このおりと婆さんの家を指すのであった。と云うのは、何と云つてもおりと婆さんは津村に取つて母方の伯母おばであり、彼女の家は母の実家に違いないのだから、そののち彼は改めてこの家と親類の付き合いを始めた。そればかりでなく、生計の援助えんじよもしてやつて、伯母のために離れを建て増したり、紙すきの工場を拡げたりした。そのお蔭で昆布の家は、ささやかな手工業しゆこうぎようではあるけれども、目立って手広く仕事をするようになったのである。

その六 入しおの波は

「で、今度の旅行の目的と云うのは？——」

二人はあたりが薄暗くなるのも忘れて、その岩の上に休んでいたが、津村の長い物語が一段落へ来た時に、私が尋ねた。

「——何か、その伯母さんに用事でも出来たのかい？」

「いや、今の話には、まだちよつと云い残したことがあるんだよ。

——」

眼の下の岩に砕くだけつつある早瀬はやせの白い泡あわが、ようよう見分けられるほどの黄たそがれ昏ではあつたが、私は津村がそう云いながら微かすかに顔を赧あかくしたのを、もののけはいで悟ることが出来た。

「——その、始めて伯母の家の垣根の外に立った時に、中で紙をすいていた十七八の娘があつたと云つただらう？」

「ふむ」

「その娘と云うのはね、実はもう一人の伯母、——亡くなつた  
おえい<sup>ばあ</sup>婆さんの孫なんだそうだ。それがちようどあの時分昆布の  
家へ手伝いに来ていたんだ」

私の推察した通り、津村の声は次第に極まり悪そうな調子になつて  
いた。

「さつきも云つたように、その女の児は丸出しの田舎娘で決して  
美人でも何でもない。あの寒中にそんな水仕事をするんだから、  
手足も無細工<sup>ぶさいく</sup>で、荒れ放題<sup>あ</sup>に荒れている。けれども僕は、大方あ  
の手紙の文句、『ひびあかぎれに指のさきちぎれるようにて』と  
云う——あれに暗示を受けたせいか、最初にひと眼水<sup>め</sup>の中に漬

かっている赤い手を見た時から、妙みょうにその娘が気に入ったんだ。それに、そう云えばそう、どこか面おもざしが写真で見える母の顔に共通なところがある。育ちが育ちだから、女中タイプなのは仕方がないが、研みがきようによつたらもつと母らしくなるかも知れない」「なるほど、ではそれが君の初音はつねの鼓つづみか」

「ああ、そうなんだよ。———どうだろう、君、僕はその娘を嫁よめに貰もらいたいと思うんだが、———」

お和わさ佐と云うのが、その娘の名であつた。おえい婆さんの娘のおもとと云う人が市田なにがしと云う柏木附近の農家へ縁づいて、そこで生れた児なのである。が、生家の暮らし向きが思わしくないので、尋じんじょう常小学を卒おえてから五条の町へ下女奉公に出たり

していた。それが十七の歳に、実家の方が手が足りないので暇ひまを貰つて家に帰り、そののちずっと農事の助けをしているのだが、冬になると仕事がなくなるところから、昆布の家へ紙すきの手伝いにやらされる。ことしももうじき来るはずだけれど、多分まだ来ていないであろう。それよりも津村は、まずおりと伯母さんや由松夫婦に意中を打ち明けて、その結果によつては、至急に呼び寄せて貰うなり、訪ねて行くなりしようと思うと云うのである。

「じゃあ、巧うまく行くと僕もお和佐さんに会える訳だね」

「うん、今度の旅行に君を誘つたのも、是非会つて貰つて、君の観察を聞きたかつたんだ。何しろ境遇があまり違い過ぎるから、その娘を貰つたとしても果して幸福に行けるかどうか、多少その



点に不安心がないこともない、僕は大丈夫と云う自信は持っているんだが」

私はとにかく津村を促してその岩の上から腰を擡げた。そして、宮滝で俵を雇って、その晩泊めて貰うことにきめてあつた国栖の昆布家へ着いた時は、すっかり夜になっていた。私の見たおりと婆さんや家族たちの印象、住居の様子、製紙の現場等は、書き出すと長くもなるし、前の話と重複もするから、ここには略すことにしよう。ただ二つ三つ覚えておくことを云えば、当時あの辺はまだ電燈が来ていないで、大きな炉を囲みながらランプの下で家族達と話をしたのが、いかにも山家らしかったこと。炉には檜、櫟、桑などをくべたが、桑が一番火の保ちがよく、熱も柔かだと

云うので、その切り株を夥しく燃やして、とても都会では思い及ばぬ贅沢さに驚かされたこと。炉の上の梁や屋根裏が、かつかつと燃え上る火に、塗りたてのコールターのように真つ黒くて、さら光っていたこと。そして最後に、夜食の膳に載っていた熊野鯖と云うものが非常に美味であつたこと。それは熊野浦で獲れた鯖を、笹の葉に刺して山越しで売りに来るのであるが、途中、五六日か一週間ほどのあいだに、自然に風化されて乾物になる、時には狐にその鯖の身を浚われることがある、と云う話を聞いたこと。——などである。

翌朝、津村と私とは相談の上、ようやくめいめいが別箇行動を取ること定めた。津村は自分の大切な問題を提げて、話をまとめ

て貰うように昆布家の人々を説き伏せる。私はその間ここにいては邪魔になるから、例の小説の資料を採訪すべく、五六日の予定で更に深く吉野川の源流地方を究めて来る。第一日は国栖を発し、東川村に後亀山天皇の皇子小倉宮の御墓を弔い、五社峠を経て川上の荘に入り、柏木に至つて一泊。第二日は伯母ヶ峰を越えて北山の荘河合に一泊。第三日は自天王の御所跡である小椽の竜泉寺、北山宮の御墓等に詣で、大台ヶ原山に登り山中に一泊。第四日は五色温泉を経て三の公の峡谷を探り、もし行けたらば八幡平、隠し平までも見届けて、木樵りの小屋にでも泊めて貰うか、入の波まで出て来て泊まる。第五日は入の波から再び柏木に戻り、その日のうちか翌日に国栖へ帰る。——私

は昆布家の人々に地理を尋ねて、大体こう云う日程を作った。そして津村との再会を約し、彼の成功を祈って出発したのであったが、津村は事によると、自分も柏木のお和佐の家まで出向くような場合があるろう、それで私が柏木へ戻って来たら念のためにお和佐の家へ立ち寄って見てくれるように、それはしかじかの所だからと、出がけにそんな話があった。

私の旅はほぼ日程の通りに<sup>はかど</sup>捗った。聞けばこの頃はあの伯母ヶ峰峠の難路にさえ乗合自動車が通うようになり、紀州の木の<sup>き</sup>本<sup>もと</sup>まで歩かずに出られるそうで、私が旅した時分とは誠<sup>まこと</sup>に隔<sup>かく</sup>世<sup>せい</sup>の感がある。が、幸い天候にも恵まれ、予想以上に材料も得られて、四日目までは道の<sup>けわ</sup>嶮しさも苦しさも「なあに」と云う気で押し通し

てしまつたが、ほんとうに参つたのはあの三さんの公谷こたにへ這入はいつた時であつた。もつともあそこへかかる前から「あの谷はえらい処ところです」とか「へえ、旦那だんなは三の公へいらつしやるんですか」とか、たびたび人に云われたので、私もあらかじめ覚悟かくごはしていた。それで四日目には少し日程を変更して五色温泉に宿を取り、案内者を一人世話して貰つて明くる日の朝早く立つた。

路は、大台ヶ原山みなもとに源を発する吉野川の流れに沿うて下り、それがもう一本の溪流と合する二にの股またと云う辺へ来て二つに分れ、一つは真つすぐに入の波へ、一つは右へ折れて、そこからいよいよ三の公の谷へ這入る。しかし入の波へ行く本道は「道」に違いないが、右へ折れる方は木深い杉すぎばやし林の中に、わずかにそれと人

の足跡を辿れるくらいな筋が附いているだけである。おまけに前夜降雨があつて、二の股川の水嵩がにわかに殖え、丸木橋が落ちたり崩れかかったりして、激流の逆捲く岩の上を飛び飛びに、時には四つ這いに這わないと越えることが出来ない。二の股川の奥に「オクタマガワ」があり、それから地蔵河原を渡渉して、最後に三の公川に達するまで、川と川との間の路は、何丈と知れぬ絶壁の削り立った側面を縫うて、ある所では両足を並べられないほど狭く、ある所では路が全く欠けてしまつて、向うの崖からこちらの崖へ丸太を渡したり、棧を打った板を懸けたり、それらの丸太や板を宙で繋ぎ合はして、崖の横腹を幾曲りも迂廻したりしている。こんな所を歩くのは、山岳家なら朝飯前の

仕事であろうが、私は元来中学時代に機械体操が非常に不得手で、鉄棒や柵たなや木馬もくばにはいつも泣かされた男なのである。その頃は年も若かったし、今ほど太つてもいなかっただから、平地を行くのなら八里や十里は歩けたけれども、こう云う難所は四肢ししを使つて進むので、足の強弱の問題でなく、全身の運動の巧拙こうせつに関する。定めし私の顔は途中幾たびか青くなり赤くなりしたことであろう。正直のところ、もし案内者が一緒でなかったら、私はとうにあの二の股の丸木橋の辺で引返したかも知れなかった。案内者の手前きまりが悪いのと、一歩進んだら後へ退くのも前へ出るのと同じように恐ろしいので、仕方がなしに顫ふるえる足を運んだのであった。

そう云う訳で、その谷あいの秋色は素晴らしい眺めであつたけれども、足もとばかり視詰めていた私は、おりおり眼の前を飛び立つ四十雀の羽音に驚かされたくらいのもので、耻かしながらその風景を細叙する資格がない。だが案内者の方はさすがに馴れたもので、刻み煙草を煙管の代りに椿の葉に巻いて口に咬え、険しい道を楽しに越えながら、あれは何と云う滝、あれは何と云う岩と、遥かな谷底を指して教えたが、

「あれは『御前申す』と云う岩です」

と、ある所でそんなことを云つた。それからまた少し行くと、

「あれは『べろべど』と云う岩です」

と云つた。私はどれがべろべどで、どれが御前申すと云う岩やら、



こわごわ谷底を覗いた<sup>のぞ</sup>ただけではつきり見届けなかったが、案内者の云うのに、昔から王の住んでいらした谷には、必ず御前申すと云う岩と、べろべどと云う岩がある、だから四五年前に東京からある偉いお方、——学者だったか、博士だったか、お役人だったか、とにかく立派なお方がこの谷を見に来られて、やはり自分が案内をした時、そのお方が「ここに御前申すと云う岩があるか？」とお尋ねになったから「へい、ございます」と云って自分がああ岩を示すと、「ではべろべどと云う岩はあるか？」と、重ねてお尋ねになったので、「へい、ございます」と、又その岩を見せてあげたら、「なるほど、そうか、それならここは自天王のいらした所に違いない」と、感心してお帰りになった、——

などと云う話をしたが、その奇妙な岩の名の由来は分らなかつた。

この案内者は外にもまだいろいろの口碑を知っていた。昔、京

方の討手がこの地方へ忍び込んだとき、どうしても自天王の御

座所が分らないので、山また山を捜し求めつつ、一日偶然この

峡谷へやって来て、ふと溪川を見ると、川上の方から黄金が流

れて来る、そこで、その黄金の流れを伝わって溯つて行つたら、

果して王の御殿があつたと云う話。王が北山の御所へお移りにな

つてから、毎朝顔をお洗いになるのに、御所の前を流れている北

山川の川原へ立たれるのが例であつたが、いつも影武者が二人

お供していて、どれが王様か見分けがつかない。討手の者がたま

たまそこを通り合わせた村の老婆ろうばに尋ねると、老婆は、「あの、  
 口から白い息を吐はいていらつしやるのが王様だ」と教えた。その  
 ために討手は襲いかかつて王の御首みしるしを挙げることが出来たが、  
 老婆の子孫にはその後代々不具ふぐの子供が生れると云う話。――  
 私は午後一時頃に八幡平はちまんたいらの小屋に行き着き、弁当箱を開きな  
 がらそれらの伝説を手帳ひかに控えた。八幡平から隠し平までは往復  
 更に三里弱であったが、この路はかえつて朝の路よりは歩きよか  
 った。しかしいかに南朝の宮方みやがたが人目を避けておられたとして  
 も、あの谷の奥は余りにも不便すぎる。「逃のがれ来て身をおくやま  
 の柴しばの戸に月と心をあわせてぞすむ」と云う北山宮の御歌は、ま  
 さかあそこでお詠よみになったとは考えられない。要するに三の公

は史実よりも伝説の地ではないであろうか。

その日、私と案内者とは八幡平の山男の家に泊めて貰つて、兎の肉をご馳走ちそうになつたりした。そして、その明くる日、再び昨日の

路を二の股へ戻り、案内者と別れてひとり入の波へ出て来た私は、ここから柏木かしわぎまではわずか一里の道程だと聞いていたけれど、

ここには川の縁に温泉が湧いてると云うので、その湯へ浸りに川のほとりへ行つてみた。二の股川を合わせた吉野川が幾らか幅はばの広い溪流けいりゅうになつた所に吊り橋つばしが懸かつていて、それを渡ると、すぐ橋の下の川原に湯が湧いていた。が、試みに手を入れると、ほんの日向水ひなたみずほどのぬくもりしかなく、百姓ひやくしやうの女たちがその湯でせつせと大根を洗っているのである。

「夏でなければこの温泉へは這入れません。今頃這入るには、あれ、あすこにある湯槽へ汲み取つて、別に沸かすのです」と、女たちはそう云つて、川原に捨ててある鉄砲風呂を指した。ちようど私がその鉄砲風呂の方を振り返つたとき、吊り橋の上から、

「おーい」

と呼んだ者があつた。見ると、津村が、多分お和佐さんであろう。娘を一人うしろに連れてこちらへ渡つて来るのである。二人の重みで吊り橋が微かに揺れ、下駄の音がコーン、コーンと、谷に響いた。

私の計画した歴史小説は、やや材料負けの形でとうとう書けずに  
しまったが、この時に見た橋の上のお和佐さんが今の津村夫人で  
あることは云うまでもない。だからあの旅行は、私よりも津村に  
取って上首尾じょうしゆびを齎もたらした訳である。

(昭和六年一月～二月)

# 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学014 谷崎潤一郎」筑摩書房

2008（平成20）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十三卷」中央公論社

1982（昭和57）年5月25日

初出：「中央公論」中央公論社

1931（昭和6）年1月～2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 吉野葛

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>